

## 第1章

# 高校生の 学習に関する意識・実態

---

- 「学習に関する意識・実態調査」の分析より -



## 第1節 高校生の学習行動

### 1. 学校での学習の様子

#### ①好きな教科・嫌いな教科

高校生が好きな教科のベスト・スリーは、①「体育」(「とても」+「まあ好き」=66.5%)、②「音楽」(47.4%)、③「地歴」(46.7%)。逆にワースト・スリーは、①「公民」(25.6%)、②「美術」(35.4%)、③「数学」(38.7%)である。時系列的にみると、「国語」「理科」「体育」「家庭」の4教科で「好き」とする者が増加している。



あなたは、次の教科や学習の時間の勉強がどのくらい好きですか。

高校生は教科の勉強をどのように考えているのだろうか。高校生の教科観を、(1)好きな教科・嫌いな教科、(2)授業の理解度、(3)がんばって勉強したい教科という3つの側面に分けてとらえた。

まず、高校生の好きな教科と嫌いな教科である(図1-1-1)。第2回調査まででは一括りにして設問した、「社会(地歴・公民)」、「芸術」を、それぞれ、「地歴」と「公民」、「音楽」と「美術」に分けて尋ねた。また教科ではないが、「総合的な学習の時間」についても尋ねている。

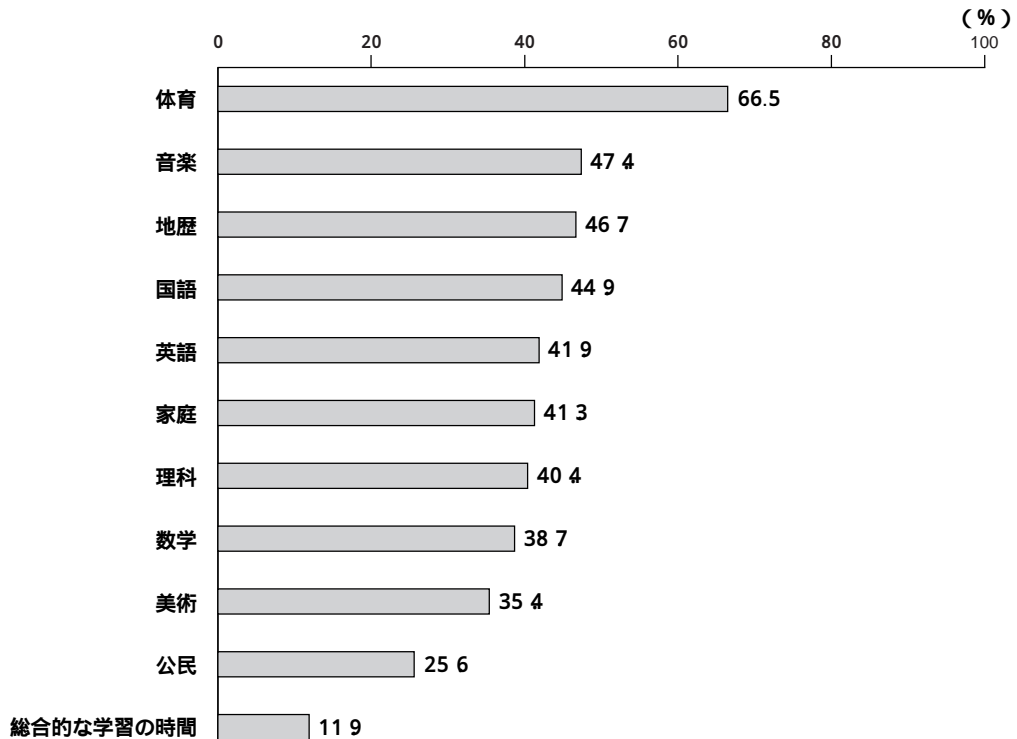
全体としてみると、高校生が好きな教科のベスト・スリーは、①「体育」(「とても」+「まあ好き」=66.5%)、②「音楽」(47.4%)、③「地歴」(46.7%)である。以下、「国語」(44.9%)、「英語」(41.9%)、「家庭」(41.3%)と続く。逆に、「好き」とする回答が少ないのは、①「公民」(25.6%)、②「美術」(35.4%)、③「数学」(38.7%)である。「履修したことがない」者が38.0%あるため比較することはできない

が、「総合的な学習の時間」が「とても好き」と答えた者は3.2%、「まあ好き」は8.7%であり、合わせても履修者のおよそ5分の1にとどまっている。

性別にみると(表1-1-1)、男女とも「体育」が好きな教科のベスト・ワンであり、逆に「公民」と「総合的な学習の時間」を好きな者はごく少ない点は共通しているが、その他の教科に関してはかなり選好が異なる。女子に比べて男子で順位が高いのは、「地歴」「理科」「数学」、女子で順位が高いのは、「音楽」「家庭」「国語」「英語」である。

時系列比較が可能な6教科について(図1-1-2)、第1回調査から第3回調査までを比較すると、6教科中、「国語」「理科」「体育」「家庭」の4教科で「好き」とする者が増加する傾向がみられる。「数学」と「英語」は横ばいであり、「好き」とする者が減少傾向にある教科はみられない。高校生の教科に対する意識は、おおむね肯定的な方向へと変化しているように見える。

図1-1-1 好きな教科



注1) 数値は「とても好き」と「まあ好き」の合計。

注2) 「総合的な学習の時間」にのみ選択項目に「履修したことがない」(38.0%)が含まれる。

注3) サンプル数は3808人。

表1-1-1 好きな教科(性別)

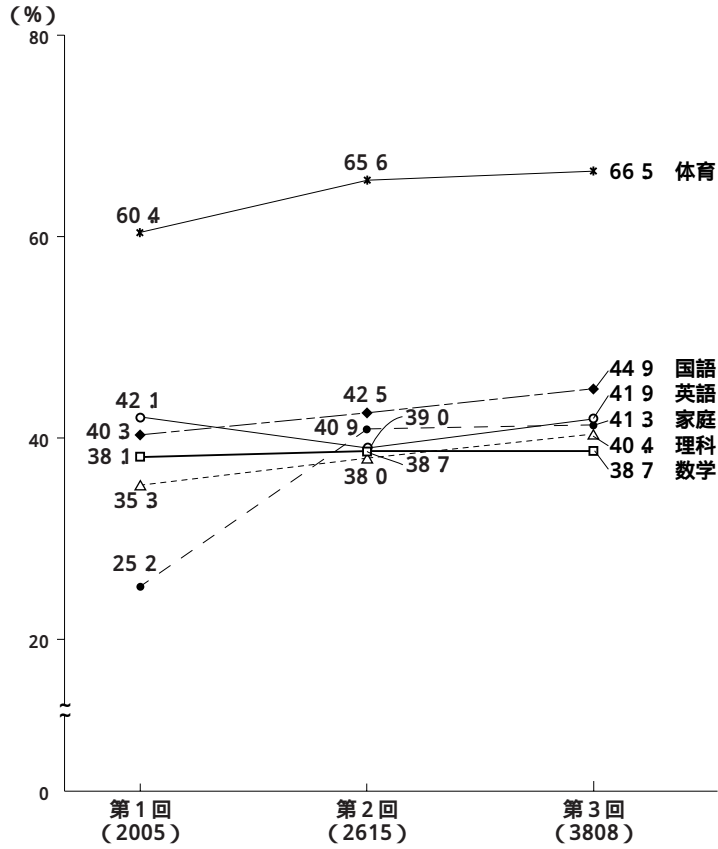
		(%)	
男子(1878)		女子(1928)	
体育	73.2	体育	59.9
地歴	50.0	音楽	58.8
理科	48.9	家庭	54.2
数学	46.8	国語	53.8
音楽	35.8	英語	48.3
国語	35.7	地歴	43.6
英語	35.2	美術	40.5
美術	30.0	理科	32.2
家庭	28.1	数学	31.0
公民	27.7	公民	23.7
総合的な学習の時間	11.7	総合的な学習の時間	12.2

注1) 数値は「とても好き」と「まあ好き」の合計。

注2) 「総合的な学習の時間」にのみ選択項目に「履修したことがない」(38.0%)が含まれる。

注3) ( )内はサンプル数。

図1-1-2 好きな教科(時系列)



注1) 数値は「とても好き」と「まあ好き」の合計。  
 注2) ( )内はサンプル数。

## ②授業の理解度

授業を「ほとんどわかっている」と「70%くらいわかっている」の合計数値の順に並べると、①「国語」44.9%、②「地歴」38.5%、③「英語」38.3%、④「数学」32.6%、⑤「理科」31.6%、⑥「公民」23.2%となる。時系列的にみると、4教科中、「国語」「理科」「英語」の3教科で、授業の理解度の上昇傾向がみられる。



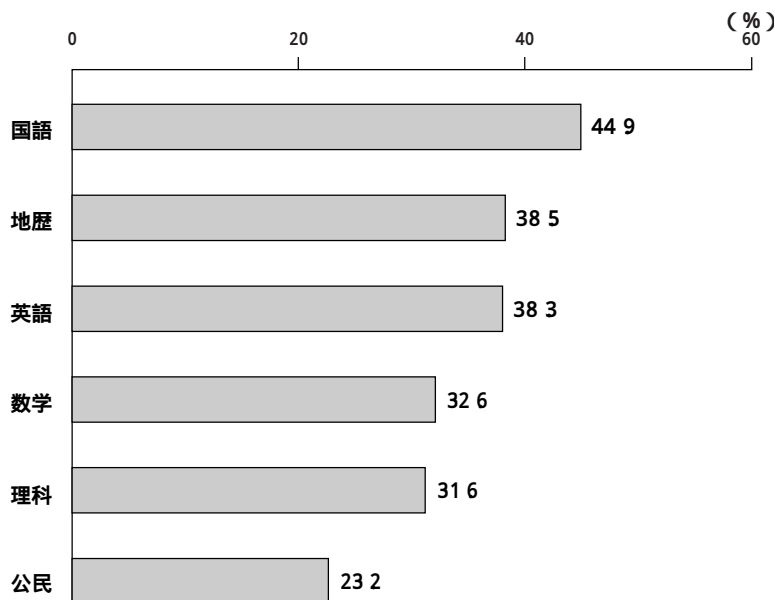
学校の授業をどのくらい理解していますか(わかっていますか)。

6教科の授業について、どの程度理解しているかについて質問した(図1-1-3)。「ほとんどわかっている」と「70%くらいわかっている」の数値を合計してみると、「国語」44.9%、「地歴」38.5%、「英語」38.3%、「数学」32.6%、「理科」31.6%、「公民」23.2%であった。しかし、理解度が相対的に高い「国語」「地歴」「英語」についても、70%以上理解していると答えたのは4割前後であり、「公

民」にいたっては4人に1人程度でしかない。これらの数値をみ限り、学習内容を消化している生徒は決して多数を占めているとはいえない。

学校ランク別にみると(図1-1-4)「理科」を除いて、いずれの教科についても、上位ランクの学校ほど理解度の高い傾向がある。いずれのランクに関しても、「国語」の理解度がもっとも高く、「公民」の理解度がもっ

図1-1-3 授業の理解度



注1) 数値は「ほとんどわかっている」と「70%くらいわかっている」の合計。  
注2) サンプル数は3808人。

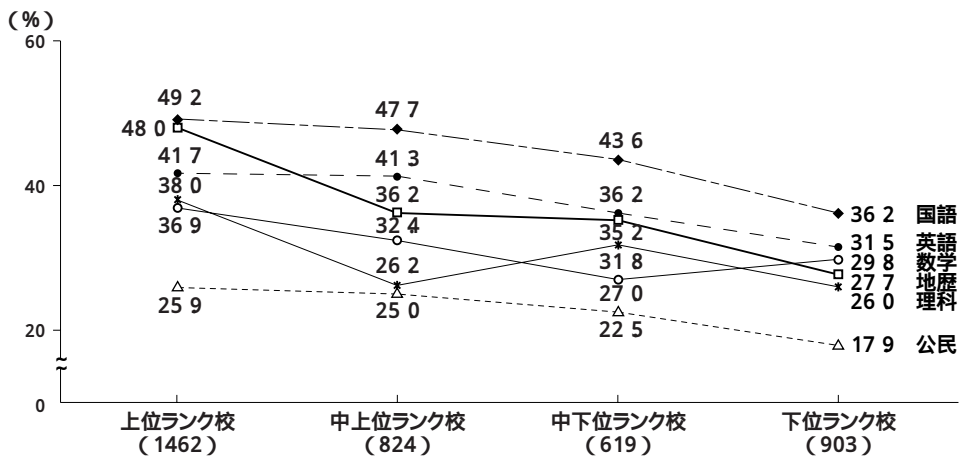
とも低いことは共通している。

授業の理解度は、時系列的にみてどう変化してきたのだろうか。比較可能な「国語」「数学」「理科」「英語」についてみたのが、図1-1-5である。4教科中、「国語」「理科」「英語」の3教科で、授業の理解度の上昇傾向がみられる（「英語」については、第2回調査から第3回調査にかけて理解度がアップしている）。「ほとんどわかっている」と「70%

くらいわかっている」と答えた者の合計は、「国語」第1回37.7% 第3回44.9%、「理科」26.0% 31.6%である。「数学」についてはほとんど変化していない。総じて、授業の理解度はやや上昇傾向にあるとみてよい。

ただし、これらの知見は、生徒集団に対して授業をどのくらいわかっているかを尋ねた結果であり、生徒による「主観的評価」であることに留意しておく必要がある。

図1-1-4 授業の理解度（学校ランク別）

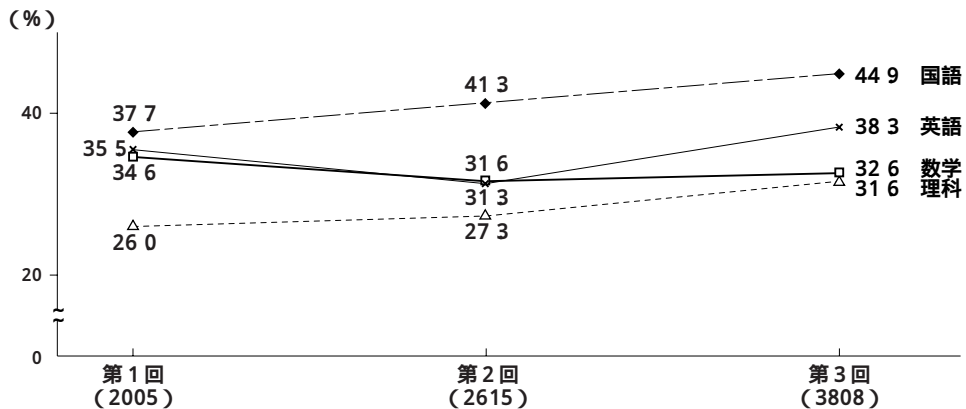


注1) 数値は「ほとんどわかっている」と「70%くらいわかっている」の合計。

注2) 「上位ランク校」は偏差値55以上、「中上位ランク校」は50以上55未満、「中下位ランク校」は45以上50未満、「下位ランク校」は45未満。

注3) ( )内はサンプル数。

図1-1-5 授業の理解度（時系列）



注1) 数値は「ほとんどわかっている」と「70%くらいわかっている」の合計。

注2) ( )内はサンプル数。

### ③がんばって勉強したい教科

①「英語」79.7%、②「数学」69.6%、③「理科」37.9%、④「国語」36.0%、⑤「地歴」24.2%を、これから特にがんばって勉強したい者が多い。「公民」を除く非実技系の教科に、回答が集中している。



これからどんな教科や学習の時間をがんばって勉強したいと思いますか。

高校生は、どんな教科をこれからがんばって勉強したいと考えているのだろうか。特にがんばりたいと思う教科を3つまで選択させた結果が、表1-1-2である。

全体としてみると、①「英語」79.7%、②「数学」69.6%、③「理科」37.9%、④「国語」36.0%、⑤「地歴」24.2%を選択する者が多い。「公民」を除く非実技系の教科に、回答が集中している。その他の教科を特にがんばって勉強したいと答えたのは、「体育」13.0%を除いて数%にとどまる。また、「総合的な学習の時間」を選択したのは5.5%である。

授業の理解度と、がんばって勉強したいか否かとの関連をみると、3つのグループに分

かれる。第一は、授業の理解度は相対的に高いが（それゆえに）、それほどがんばって勉強したいとは思われていない教科。「国語」と「地歴」があてはまる。第二は、理解度はそれほど高くはないが（それゆえに）、これからがんばりたい教科。「英語」「数学」「理科」の3つが該当する。最後は「公民」で、理解度も低くがんばって勉強しようとも考えられていない。

学校ランク別にみると、「数学」「理科」「英語」の3教科を特にがんばって勉強したい者が、学校ランクの上位に多く、逆に下位で「国語」をあげる者が多い傾向がある。

表1-1-2 がんばって勉強したい教科（学校ランク別）

(%)

	全体 (3808)	学校ランク			
		上位ランク校 (1462)	中上位ランク校 (824)	中下位ランク校 (619)	下位ランク校 (903)
国語	36.0 ④	33.4 ④	32.3 ④	42.6 ③	38.9 ③
地歴	24.2 ⑤	23.3 ⑤	22.1 ⑤	26.2 ⑤	26.4 ⑤
公民	5.4	5.3	4.7	7.4	4.8
数学	69.6 ②	79.1 ②	73.3 ②	52.8 ②	62.2 ②
理科	37.9 ③	45.6 ③	41.0 ③	27.3 ④	29.7 ④
英語	79.7 ①	82.2 ①	84.6 ①	75.3 ①	74.3 ①
音楽	7.5	5.1	6.8	12.1	8.9
美術	5.1	3.1	4.5	9.0	6.4
体育	13.0	7.5	12.4	15.0	21.0
家庭	4.2	2.7	2.3	8.7	5.4
総合的な学習の時間	5.5	2.4	7.3	8.1	7.2

注1) 回答は「特にがんばりたいと思う教科」を11項目中3つまで選択。

注2) 内数字は順位。

注3) ( )内はサンプル数。

## ④ 文理のコース

現在のコース選択は、「文系」47.8%、「理系」38.5%、「どちらでもない・未定」12.2%という状況である。男子で、また学校ランクが上位であるほど、「理系」の比率が高い。



あなたのことについてうかがいます。あなたは文理どちらのコースですか。

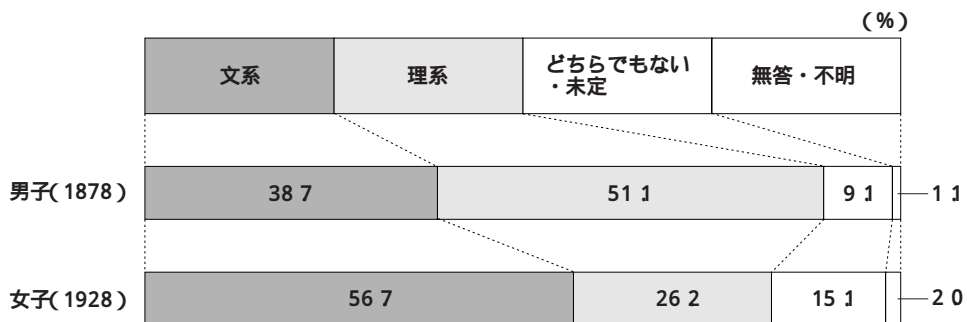
現在の、文系・理系のコース選択の状況を尋ねた。ただし、設問形式から、①学校で類型制が採用されており、そこでどのコースを選択しているかと、②学校では類型制は採用されていないが、主観的に文系・理系どちらにあてはまるかの、双方が含まれると考えられる。

全体としてみると、「文系」47.8%、「理系」38.5%、「どちらでもない・未定」12.2%である。

性別に大きく異なっており(図1-1-6)、女子は「文系」(56.7%)、男子は「理系」(51.1%)が、それぞれ過半数を占める。

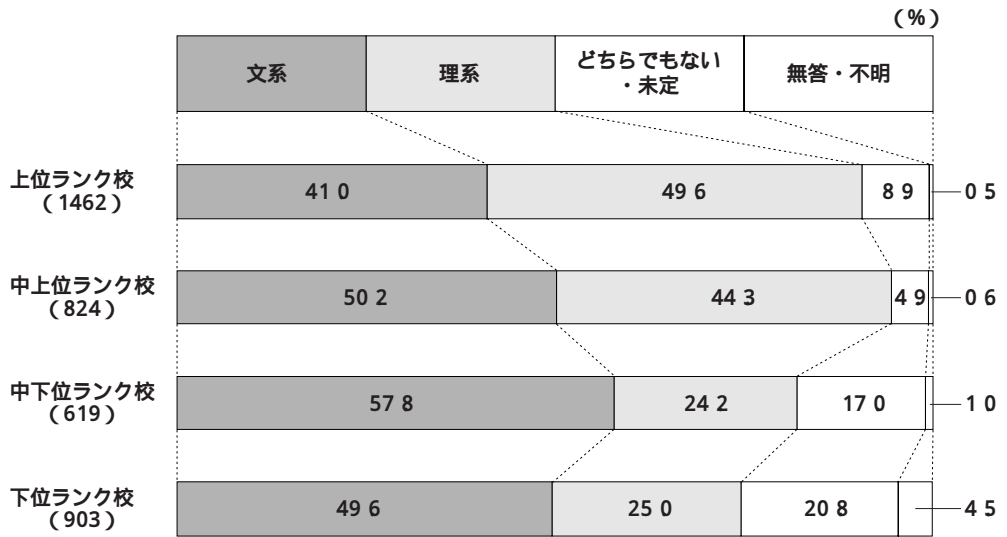
学校ランクによっても文系、理系の構成比率には大きな差がある(図1-1-7)。中下位ランク校と下位ランク校の間には顕著な差はないが、学校ランクが上位であるほど「理系」が多い傾向がある(「理系」の比率=上位ランク校49.6%、中上位ランク校44.3%、中下位ランク校24.2%、下位ランク校25.0%)。

図1-1-6 文理のコース(性別)



注) ( )内はサンプル数。

図1-1-7 文理のコース（学校ランク別）



## ⑤ 高校3年間で履修する予定の科目

科目によって履修（予定）率の差は大きく、半数を切っているのは、「数学Ⅲ」「物理」「地学」「地理」「公民全科目」である。



あなたは、高校3年間でどの教科科目を履修することになると  
 思いますか。履修する予定のものすべてに をつけてください。

高校1年生から3年生までの「数学」「理科」「地歴」「公民」の4教科に関して、高校3年間で履修することになる科目（予定を含む）をすべて選択させ、結果を整理したのが表1-1-3である。

教科別にまとめると、以下のようになる。  
 数学...数学Ⅰ・数学A 92.1%、数学Ⅱ・数学B 83.3%、数学Ⅲ 40.7%  
 理科...化学 76.1%、生物 66.0%、物理 34.3%、地学 14.9%  
 地歴...世界史 73.5%、日本史 58.0%、地理 39.2%

公民...倫理 48.6%、政治・経済 46.1%、現代社会 39.0%

履修（予定）率が半数を切っているのは、「数学Ⅲ」「物理」「地学」「地理」「公民全科目」である。

学校ランク別にみると、次の傾向がある。

- ① 下位ランクの学校ほど履修率が高い科目は、「現代社会」と「生物」の2科目である。
- ② 多くの科目は上位ランクの学校ほど履修率が高い。特に、「数学Ⅲ」「倫理」「政治・経済」「物理」「化学」で差が大きい。

表1-1-3 高校3年間で履修する予定の科目（学校ランク別）

(%)

履修予定率	全体 (3808)	学校ランク			
		上位ランク校 (1462)	中上位ランク校 (824)	中下位ランク校 (619)	下位ランク校 (903)
90%以上	数学Ⅰ・数学A 92.1	数学Ⅰ・数学A 96.4 数学Ⅱ・数学B 95.6	数学Ⅰ・数学A 94.3 数学Ⅱ・数学B 91.6	—————	—————
80%以上	数学Ⅱ・数学B 83.3	化学 81.5	—————	数学Ⅰ・数学A 87.2 世界史 82.1	数学Ⅰ・数学A 86.4
70%以上	化学 76.1 世界史 73.5	世界史 77.6 倫理 76.3	化学 79.0 世界史 75.2	化学 70.8	生物 76.9 数学Ⅱ・数学B 72.4
60%以上	生物 66.0	政治・経済 67.6 生物 60.3	日本史 66.5 生物 64.6	生物 65.8	化学 68.4
50%以上	日本史 58.0	日本史 54.4 数学Ⅲ 52.9	地理 52.8	数学Ⅱ・数学B 59.0 日本史 57.2	世界史 59.6 現代社会 59.4 日本史 56.5
40%以上	倫理 48.6 政治・経済 46.1 数学Ⅲ 40.7	物理 49.7	政治・経済 46.5 数学Ⅲ 40.5	現代社会 43.0	—————
30%以上	地理 39.2 現代社会 39.0 物理 34.3	地理 38.6	現代社会 39.1 倫理 34.6 物理 33.1	倫理 38.9 政治・経済 34.6 地理 33.3	地理 31.6
20%以上	—————	現代社会 24.6	地学 22.2	数学Ⅲ 28.9 物理 26.7	数学Ⅲ 29.3 倫理 23.0
10%以上	地学 14.9	地学 13.3	—————	地学 11.1	政治・経済 18.6 物理 15.8 地学 13.4

注1) 複数回答。

注2) ( )内はサンプル数。

## ⑥ 授業の受け方

時系列的にみると、受講態度の積極化と授業中の逸脱行動の減少を示唆する変化が現れている。「黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く」(第1回58.1% 第3回68.4%)、「授業でわからないことは、あとで先生に質問する」(27.6% 36.6%)が増加した。他方で、「近くの人とおしゃべりをする」(56.2% 38.1%)、「マンガをかいたり、文房具で遊ぶ」(31.1% 17.7%)は減少をみた。



あなたの授業中の様子についてうかがいます。

授業の受け方を中心に、13項目を設定して質問を行った。

「黒板に書かれたことを、きちんとノートに書く」は、「よくある」77.6%と「時々ある」16.0%を加えると9割を超える。板書されたことはおおむねノートすると大多数が答えている。他方、「黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く」については、そうする者は格段に減少する(「よくある」28.0%、「時々ある」40.4%)。

授業中の逸脱行動に関しては、「ぼうっと他のことを考えている」(「よくある」28.7%)、「授業中にいねむりをする」(24.3%)、「近くの人とおしゃべりをする」(10.3%)、「内職(他の科目の勉強など)をする」(8.3%)、「マンガをかいたり、文房具で遊ぶ」(5.0%)と、頻度の高いものでも、4分の1程度にとどまる。

「授業の内容が難しいと思う」のは、「よくある」28.7%、「時々ある」48.3%。逆に「授業の内容が簡単すぎると思う」のは、それぞれ1.0%と10.6%である。「授業の内容が難しいと思う」ことのほうが圧倒的に多いことがわかる。

「本当は解ける問題を不注意で間違えるとくやしいと思う」(「よくある」75.7%)、「テストで間違えるとくやしいと思う」(62.8%)

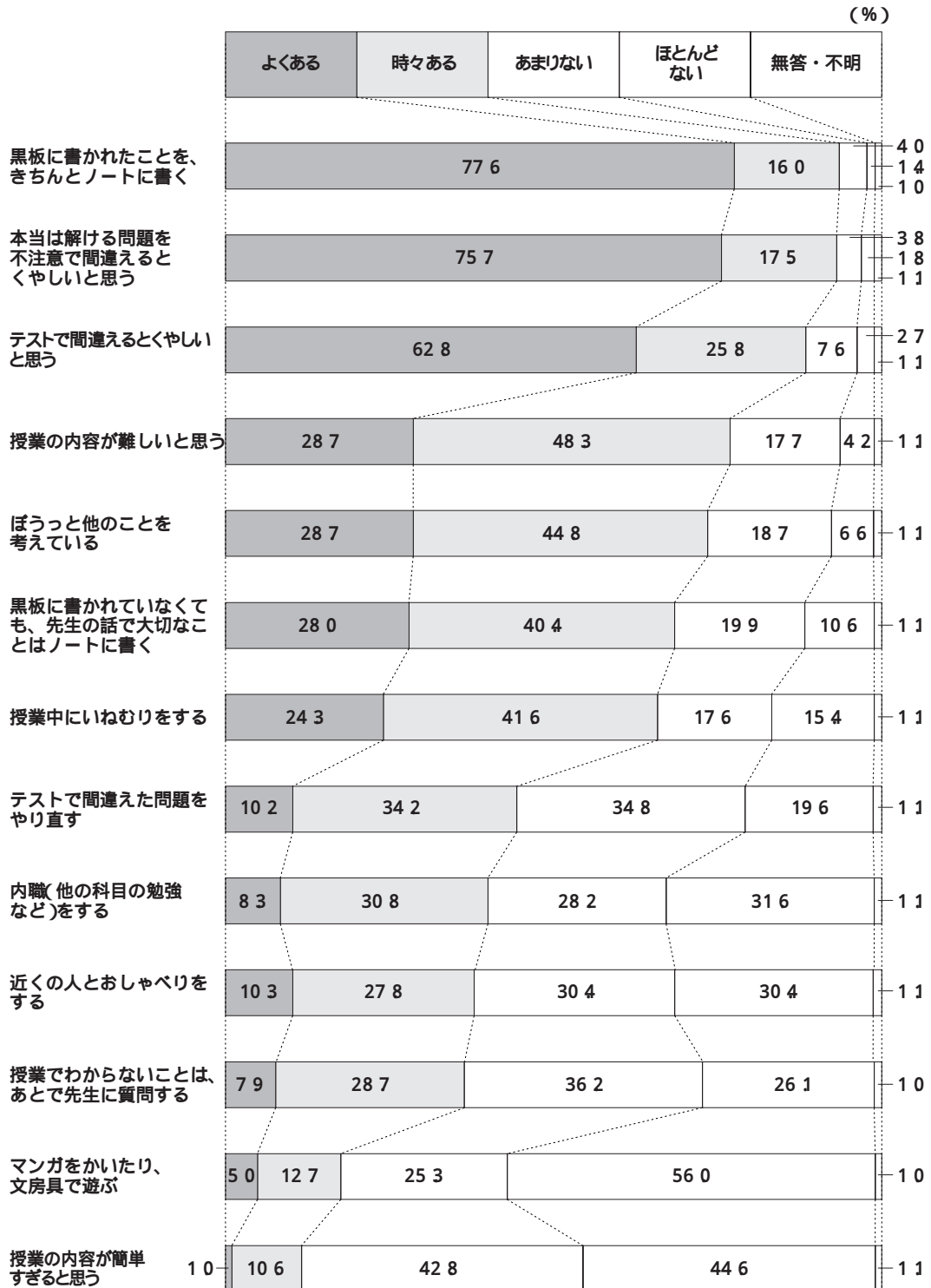
は6割以上の高率を示す。その一方で、「テストで間違えた問題をやり直す」は、10.2%(「よくある」)にとどまり、また「授業でわからないことは、あとで先生に質問する」も7.9%にすぎない(図1-1-8)。

以上の授業の受け方は、時系列的にみてどう変化してきたのだろうか。第1回調査から第3回調査にかけて、顕著な変化がみられたのは次の点である。

①「黒板に書かれていなくても、先生の話で大切なことはノートに書く」(「よく」+「時々ある」=第1回58.1% 第3回68.4%)、「授業でわからないことは、あとで先生に質問する」(27.6% 36.6%)の増加。②「近くの人とおしゃべりをする」(56.2% 38.1%)、「マンガをかいたり、文房具で遊ぶ」(31.1% 17.7%)が顕著に減少。③「内職(他の科目の勉強など)をする」(44.6% 39.1%)もわずかに減少(図1-1-9)。

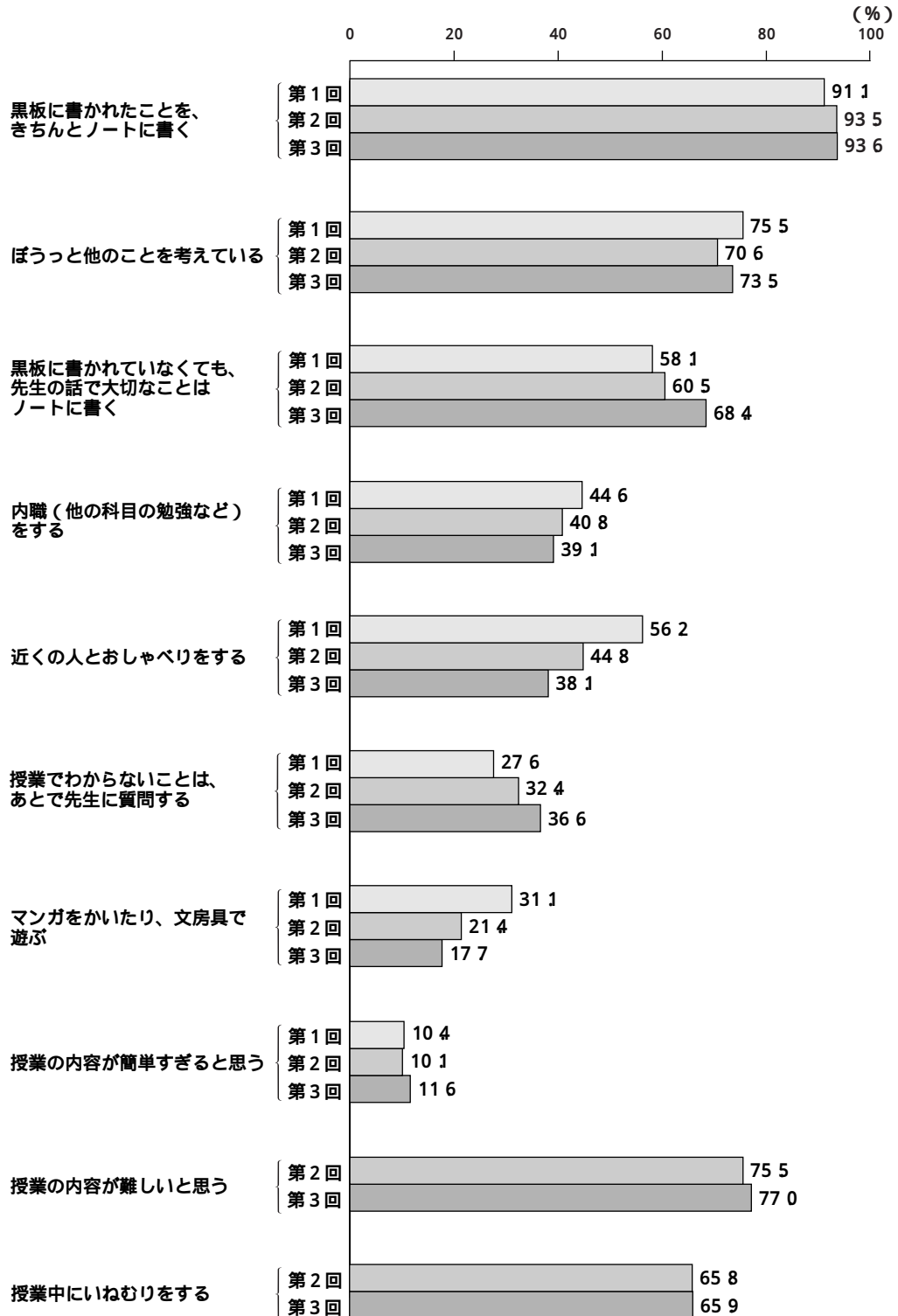
これらからみえてくるのは、受講態度の積極化と授業中の逸脱行動の減少である。概して、「まじめに、積極的に授業を受けている」と答える生徒が、ここおよそ10年間で増加している。ただし、これらの傾向は、生徒たちの自己評価、主観的な判断であることに留意を要するだろう。

図1-1-8 授業の受け方



注) サンプル数は3808人。

図1-1-9 授業の受け方(時系列)



注1) 数値は「よくある」と「時々ある」の合計。

注2) は第1回に該当項目なし。

注3) サンプル数は第1回2005人、第2回2615人、第3回3808人。

## ⑦好きな学校の勉強方法

生徒たちが好む勉強方法（授業のタイプ）は、①「先生が黒板を使いながら教えてくれる授業」82.1%（「とても好き」+「好き」）、②「友だちと話し合いながら進めていく授業」60.8%、③「グループで何かを考えたり調べたりする授業」51.3%、④「ドリルやプリントを使ってする授業」50.8%である。グループ学習や友だちとの話し合いを好む生徒は半数を超えているものの、昔ながらの黒板を使って先生が教えてくれる授業が圧倒的な支持を得ている。



あなたは、次にあげる学校の勉強方法は、どのくらい好きですか。

さまざまな勉強方法（授業のタイプ）の中で、高校生はどのようなタイプの授業を好んでいるのだろうか。

「とても好き」と「好き」の合計比率に着目して10のタイプを並べてみると次のようになる。

5割以上の生徒が好きだと答えている授業

- ①「先生が黒板を使いながら教えてくれる授業」（82.1%）
- ②「友だちと話し合いながら進めていく授業」（60.8%）
- ③「グループで何かを考えたり調べたりする授業」（51.3%）
- ④「ドリルやプリントを使ってする授業」（50.8%）
- ⑤「学校外のいろいろな場所に行つてする授業や調査」（50.7%）

3割程度の生徒しか好きだと答えていない授業

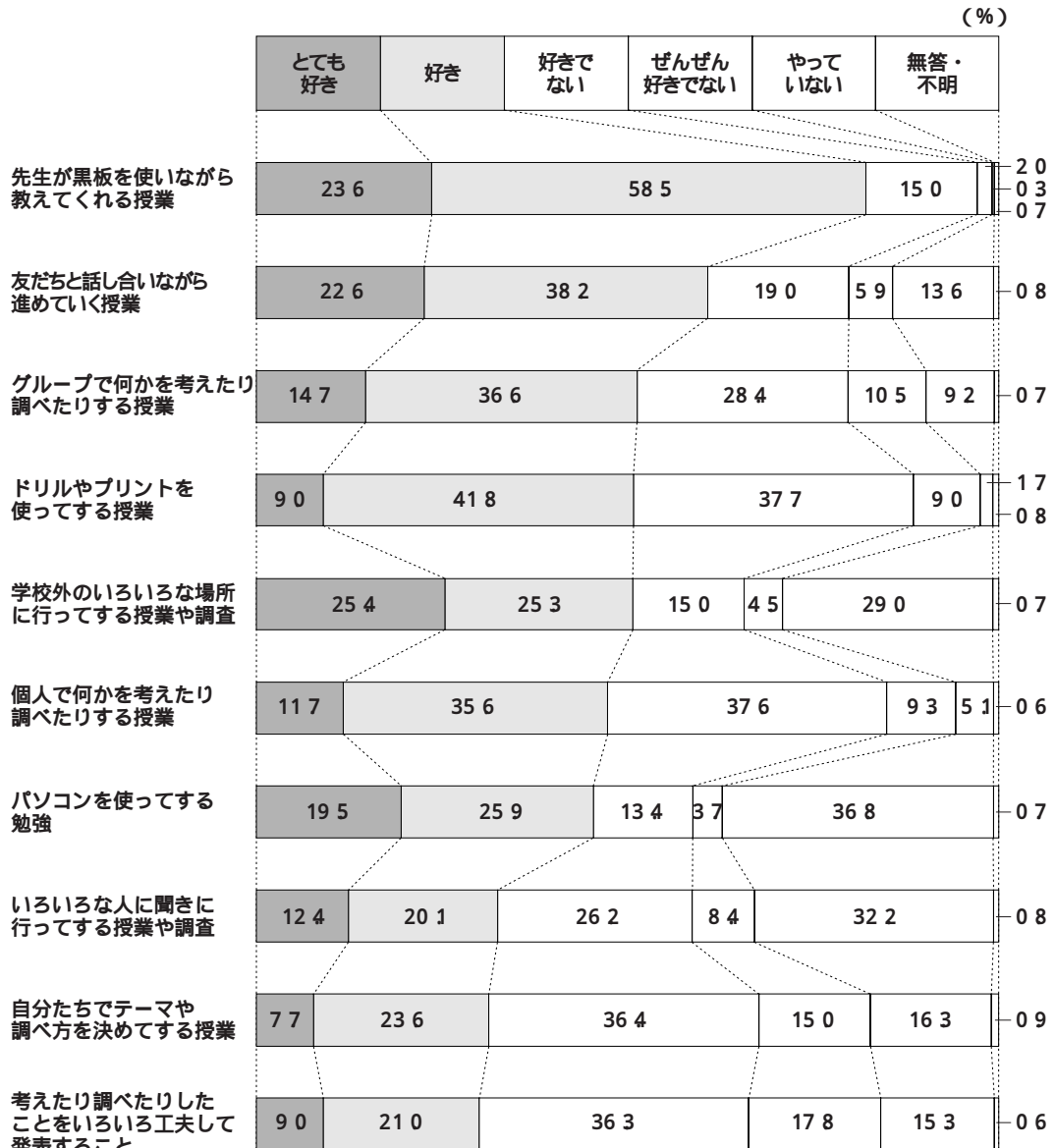
- ①「考えたり調べたりしたことをいろいろ工夫して発表すること」（30.0%）
- ②「自分たちでテーマや調べ方を決めてする授業」（31.3%）
- ③「いろいろな人に聞きに行つてする授業や調査」（32.5%）

グループ学習や友だちとの話し合いを好む生徒が半数を超えているものの、昔ながらの黒板を使って先生が教えてくれる授業が圧倒的な支持を得ていることが特徴である。またドリルやプリントを使った授業の支持率も相対的に高い（図1-1-10）。

この設問で同時にわかるのは、そうした多様なタイプの授業が、どの程度、高校現場で実施されているのかである。「やっていない」の比率が大きいのは、①「パソコンを使ってする勉強」36.8%、②「いろいろな人に聞きに行つてする授業や調査」32.2%、③「学校外のいろいろな場所に行つてする授業や調査」29.0%である。パソコンを使った勉強や、いわゆる「調べ学習」は、高校現場では必ずしもすべての学校で行われているわけではないことがうかがえる。

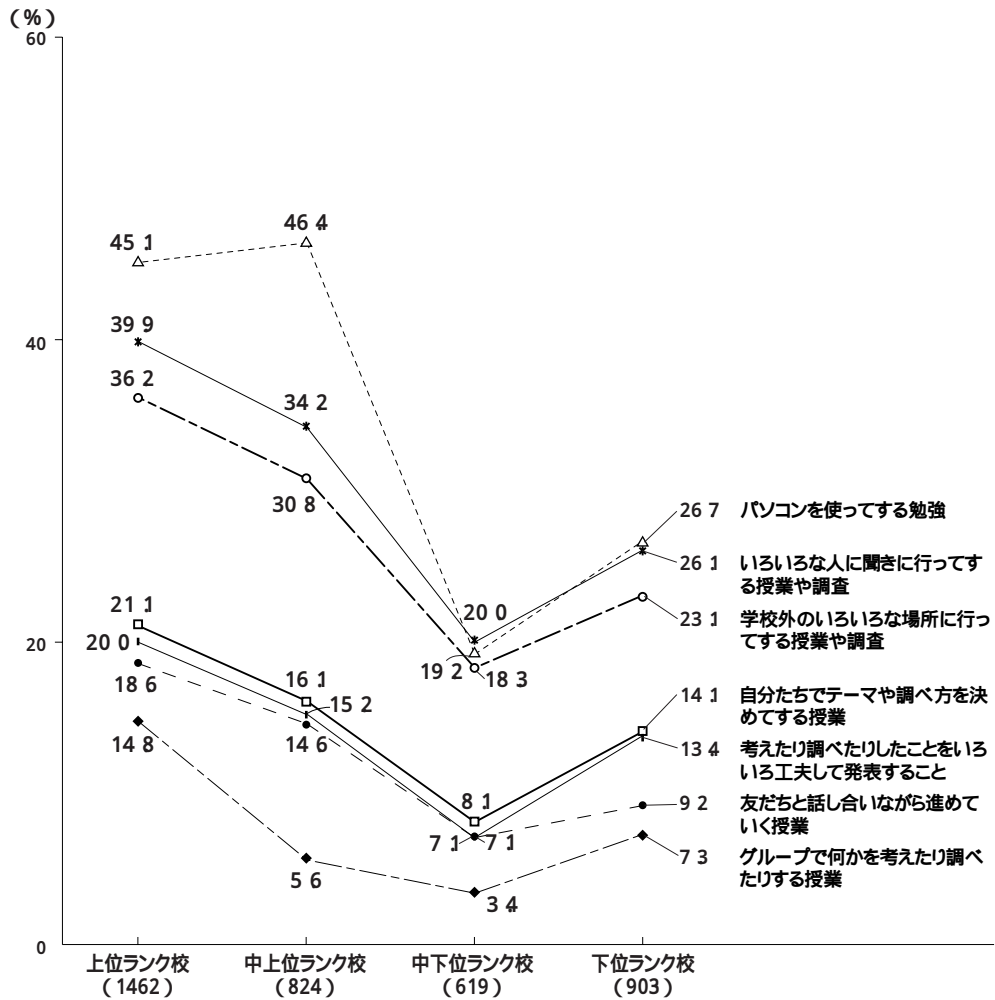
さまざまなタイプの授業の実施率は、学校ランクによっても異なっている（図1-1-11）。図を一瞥してわかるように、上位ランクの高校で実施率が低い——さまざまなタイプの授業について「やっていない」が多く、言い方をかえれば、板書型の伝統的授業に依存する度合いの高いことが示唆できる。

図1-1-10 好きな学校の勉強方法



注) サンプル数は3808人。

図1-1-11 やっていない授業・勉強方法（学校ランク別）



注1) 数値は「やっていない」割合。  
 注2) ( )内はサンプル数。

## 2. 家での学習の様子

### ① 家庭学習の頻度

週あたりの家庭学習の日数は、「ほとんど毎日する(6～7日)」19.5%、「週に半分以上はする(4～5日)」24.3%で、「家ではほとんど勉強しない」は23.1%と4人に1人に近い。時系列的にみると、「ほとんど毎日する」が28.2%(第1回)から19.5%(第3回)へと減少し、逆に「家ではほとんど勉強しない」が17.3%から23.1%へと増加をみた。学校ランクによる差も大きく、下位ランク校では家庭での学習習慣をほとんど持たない生徒たちが多数派を占める。

#### Q

家での勉強についてうかがいます(学習塾や予備校、家庭教師との学習は除きます)。あなたはふだん、家でどのくらい勉強をしますか。

第3回調査では、家庭での学習の習慣を、(1)週に何日くらい勉強をするか、(2)学習時間の長さ、(3)テスト前の勉強の開始時期という3つの側面からとらえた。

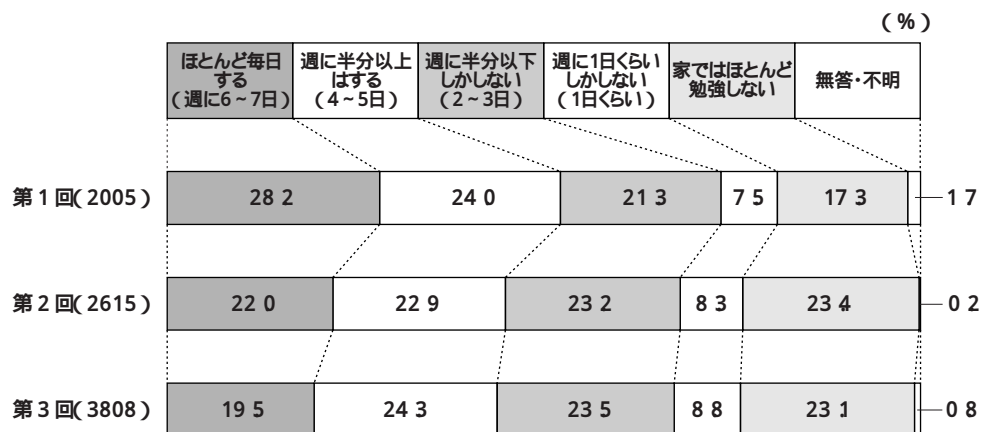
まず、週に何日くらい家で勉強するかである。学習塾や予備校、家庭教師との学習は除いて尋ねた。

全体としてみると、「ほとんど毎日する(6～7日)」が19.5%、「週に半分以上はする(4～5日)」が24.3%であり、両者を合わせるとおよそ45%が週に4日ないし5日以上学習す

る習慣を持っていることになる。他方、「家ではほとんど勉強しない」と答えた生徒は23.1%と4人に1人に近い。

これを時系列的にみると、「ほとんど毎日する」が28.2%(第1回)から19.5%(第3回)へと減少し、逆に「家ではほとんど勉強しない」が17.3%から23.1%へと増加をみた。1990年代を通じて、高校生の家庭での学習頻度はより小さい方向へとシフトし、「(家庭)学習からの撤退」が進んだといえる(図1-1-12)。

図1-1-12 家庭学習の頻度(時系列)



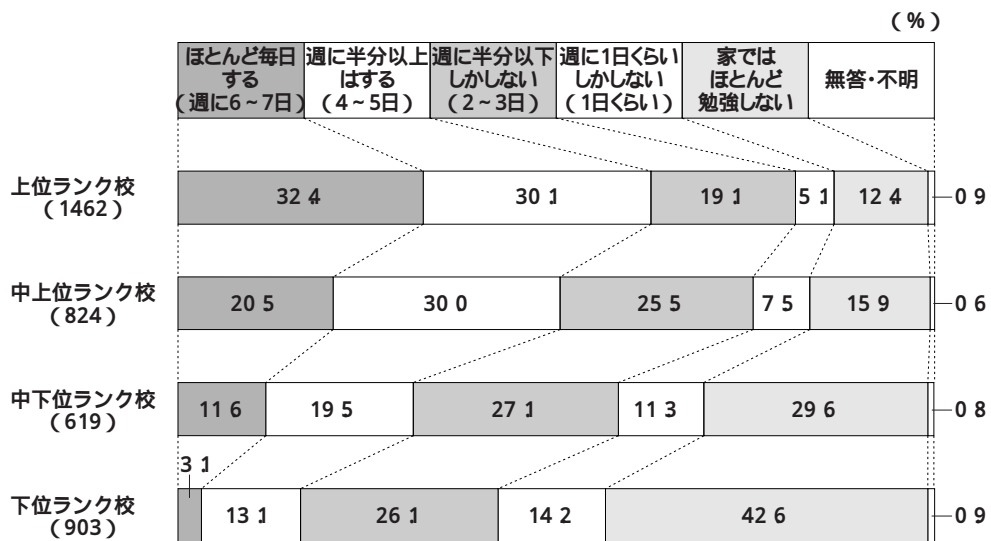
注) ( )内はサンプル数。

家庭での学習習慣は、在学する学校によって大きく異なっている（図1-1-13）。

上位ランク校では、「ほとんど毎日する」が32.4%、「週に半分よりはする」は30.1%であり、6割以上が少なくとも週に半分より以上家庭で勉強する習慣を保持している。「家ではほとんど勉強しない」は12.4%と1割強にとどまる。

他方、下位ランク校では、「家ではほとんど勉強しない」が42.6%と最頻値であり、「週に1日くらいしかしない」14.2%を合わせると半数を超える。「ほとんど毎日する」はごくごく少数で3.1%、「週に半分よりはする」も13.1%にすぎない。家庭での学習習慣をほとんど持たない生徒たちが多数派を占めるような学校風土が優勢である。

図1-1-13 家庭学習の頻度（学校ランク別）



注) ( )内はサンプル数。

## ②家での学習時間

平日の学習時間の平均は71分、日曜日の学習時間は87分、平日のテレビ視聴時間は112分である。平日の学習時間について分布をみると、もっとも多いのが「ほとんどしない」の22.8%。これに「およそ30分」14.3%と「1時間」20.4%を加えた1時間程度以下の学習時間の者は、合計6割弱（57.5%）に及ぶ。反対に、3時間以上学習する者は、1割を切る。学習時間は学校ランクが下がるにつれて激減する傾向にある。

平日の学習時間（平均）を時系列的にみると、第1回調査92分、第2回調査77分、第3回調査71分で、約10年間に2割強の減少をみた。「ほとんどしない」は第1回調査16.8%から第3回調査22.8%へと増加し、「3時間以上」は17.8%から8.7%へと半減した。

### Q

あなたはふだん（月曜日～金曜日）学校での授業以外に1日に何時間くらい勉強していますか。学習塾や予備校、家庭教師について勉強する時間も含めてください。

日曜日は、家で何時間くらい勉強しますか。学習塾や家庭教師について勉強する時間も含めてください。

ふだん（月曜日～金曜日）テレビを1日に何時間くらい見ますか。

それでは、高校生は1日に何時間くらい勉強しているのだろうか。今度は学習習慣を時間的長さの面からとらえてみよう。平日（月曜日から金曜日）と日曜日に分けて、塾や予備校などを含めた勉強時間を尋ねた（平日の学校での授業の時間は除く）。なお、対照のために平日のテレビを見る時間も尋ねている。

全体としてみると、平日の学習時間の平均（概算）は1時間11分（71分）、日曜日の学習時間は1時間30分弱（87分）。一方、平日にテレビを見る時間は2時間弱（112分）である。平日よりも日曜日のほうが勉強時間が長く、また平日に勉強する時間は、テレビを見る時間より約40分短い。

図1-1-14はその分布をみたものである。平日の学習時間は、最頻値が「ほとんどしない」の22.8%。「およそ30分」が14.3%、「1時間」が20.4%であり、これらを合わせた1時間程度以下の学習時間の者は、合計6割弱

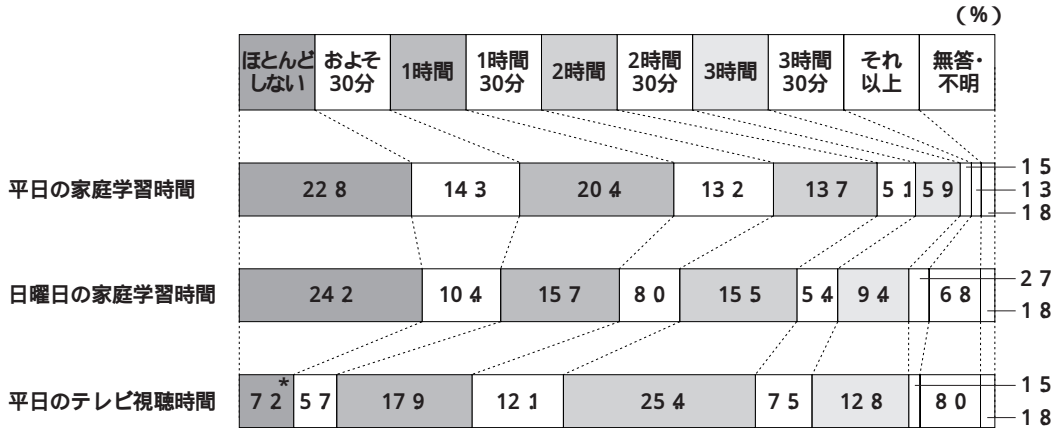
（57.5%）に及ぶ。3時間以上学習する者は、1割を切る。時間の観点からみる限り、多くの高校生にとって、家庭は勉強中心の場とはなっていない。

図1-1-15は、平日の学習時間、日曜日の学習時間、平日のテレビ視聴時間の平均値を、学校ランク別に示したものである。学校ランクによって、それらの時間は大きく異なっている。

図をみると、学校ランクが下がるにつれてテレビ視聴時間（平均）はゆるやかに増加する（上位ランク校96.3分、中上位ランク校119.0分、中下位ランク校121.4分、下位ランク校126.8分）。これに対して学習時間は逆に学校ランクが下がるにつれて激減する。平日の学習時間の平均は、上位ランク校98.8分、中上位ランク校67.0分、中下位ランク校56.8分、下位ランク校38.2分である。

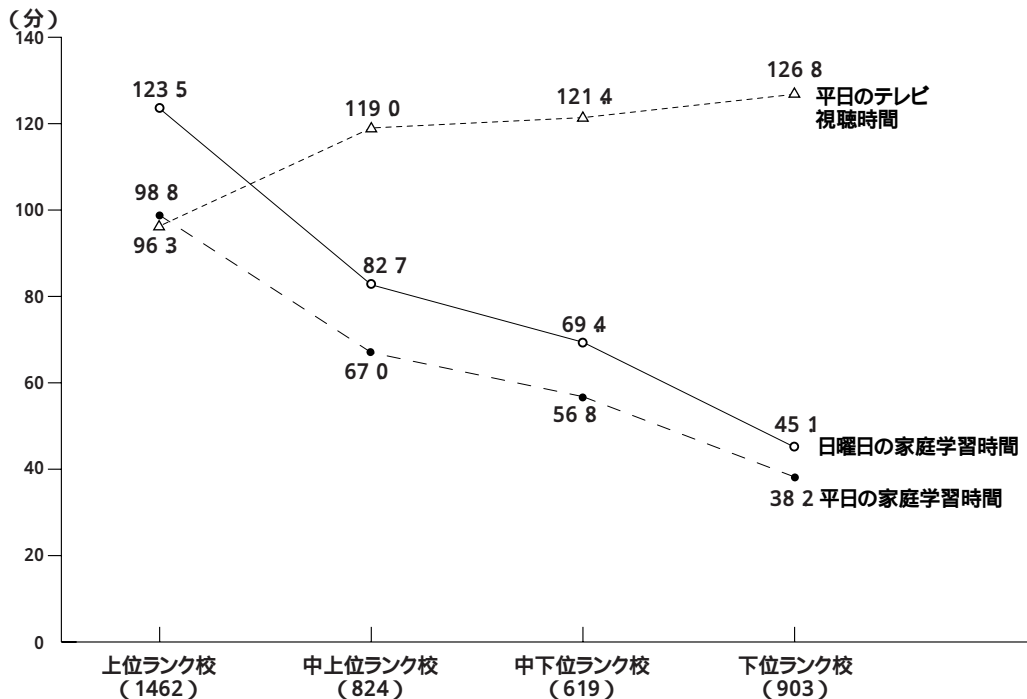
それでは、高校生の学習時間は、第1回調

図1-1-14 家での学習時間・テレビ視聴時間



注1) 家庭学習時間には、塾や予備校、家庭教師について勉強する時間も含む。  
 注2) \*は「ほとんど見ない」割合。  
 注3) サンプル数は3808人。

図1-1-15 家での学習時間・テレビ視聴時間（学校ランク別平均値）



注1) 数値の単位は分。  
 注2) 「ほとんど見ない(ほとんど見ない)」を0分、「およそ30分」を30分、「1時間」「1時間30分」「2時間」「2時間30分」「3時間」「3時間30分」はそれぞれの時間。「それ以上」を4時間として平均時間を算出した。  
 注3) ( )内はサンプル数。

査からどう変化してきたのだろうか。

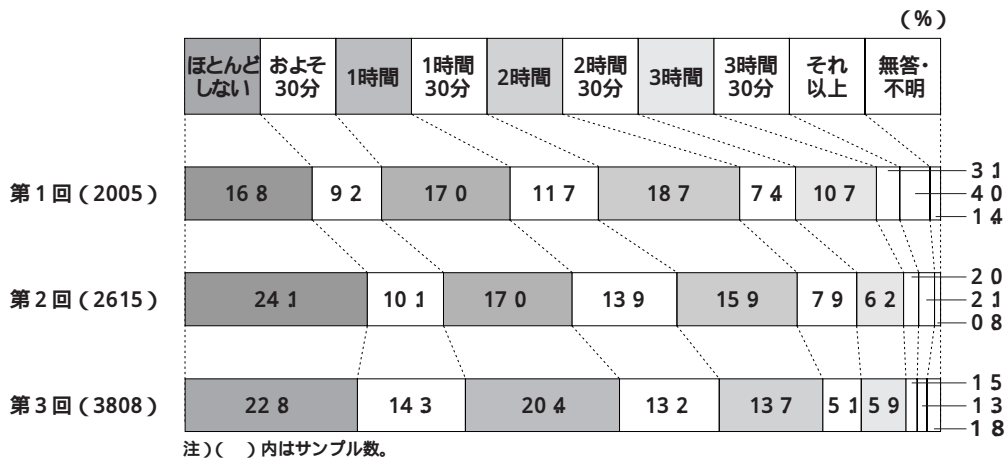
第1回調査時点における平日の学習時間の平均は92分、第2回調査は77分であった。第3回調査のそれは、先に述べたように71分である。約10年間に、高校生の学習時間は、実時間にして約20分、2割強の減少をみた。

学習時間の分布の変化をみると(図1-1-16)「ほとんどしない」は第1回調査16.8%から第3回調査22.8%へと増加し、「3時間以上」「3時間」「3時間30分」「それ以上」の合計)は17.8%から8.7%へと半減した。

第1回調査時点における回答の最頻値は「2時間」であったが、第3回調査時点では「ほとんどしない」となった。この結果が、先の平均時間の減少である。

1990年代は、長く抑制されてきた高等教育進学率が上昇に転じ、高卒者の進路と高校進路指導が「進学シフト」を経験した時代だった。上級学校へとさらに進学して学習する生徒が増加したこの時期に、高校生の学習時間は減少し、「学びからの撤退」現象が進展した。

図1-1-16 平日の家庭学習時間(時系列)



### ③ テスト勉強の開始時期

テスト勉強の開始時期は、「1週間くらい前から」35.5%、「10日くらい前から」16.4%、「4～5日くらい前から」14.1%で、1週間くらい前を中心としてその前後から始めるのが一般的である。「ほとんどしない」は2.1%、「当日の朝くらい」は1.0%とごく少数派である。



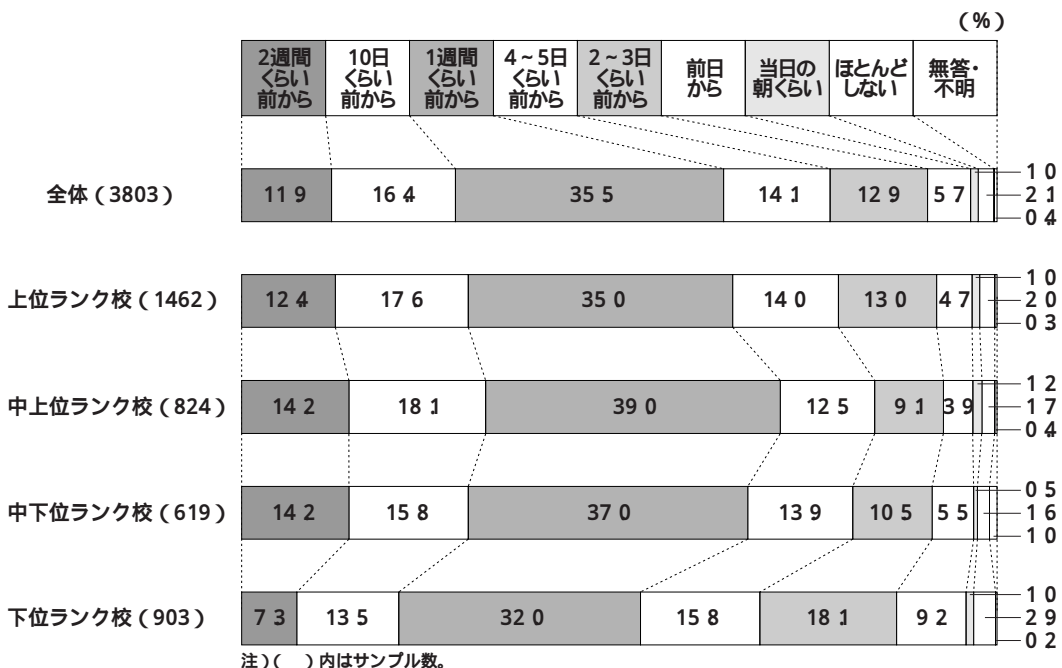
テスト（定期考査）前には、あなたはいつ頃からテスト勉強を始めますか。

高校生はテスト（定期考査）前にいつ頃から、いわゆるテスト勉強を始めるのだろうか。全体的としてみると（図1-1-17）最頻値は「1週間くらい前から」で35.5%、これに「10日くらい前から」（16.4%）、「4～5日くらい前から」（14.1%）が続く。「ほとんどしない」は2.1%、「当日の朝くらい」は1.0%とごく少数派である。通常は家での学習習慣がない生徒であっても、テスト前にはなんらかのテスト勉強をすることが推測できる。テ

スト勉強の開始時期はおよそ1週間くらい前を中心としてその前後から始めるというのが一般的である。

学校ランク別にみると、中上位ランク校でやや早めにテスト勉強が開始される傾向があり、下位ランク校で準備が遅い。「1週間くらい前」以前からテスト勉強を開始する生徒の比率は、上位ランク校65.0%、中上位ランク校71.3%、中下位ランク校67.0%、下位ランク校52.8%である。

図1-1-17 テスト勉強の開始時期（学校ランク別）



## ④家での勉強内容

家でする勉強の内容として半数を超えているのは、第一に「学校の宿題」(81.4%)、第二に「学校の授業の予習」(64.5%)である。この2つ以外はいずれも4割を切っており、高校生の学習が学校中心、予習中心であることがわかる。第1回調査から第3回調査にかけて、予習中心の傾向がますます強まった(「学校の授業の予習」第1回55.1% 第2回59.2% 第3回64.5%)。

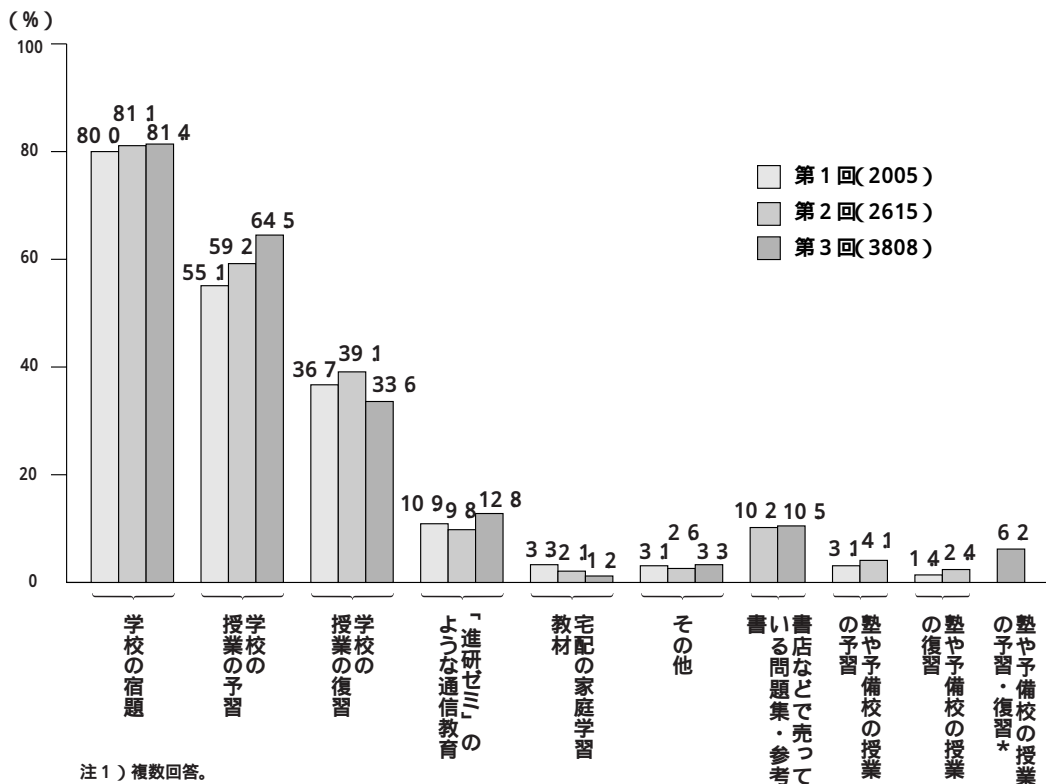


家では主にどんな勉強をしていますか。

ここまで家庭での学習について、主として量的な側面(家庭学習の頻度や時間)に注目してきた。次に質的な側面をみることにしよう。まず、家での勉強の内容である。

家でする勉強の内容として半数を超えているのは、第一に「学校の宿題」(81.4%)、第二に「学校の授業の予習」(64.5%)である(図1-1-18)。この2つ以外はいずれも4

図1-1-18 家での勉強内容(時系列)



注1) 複数回答。

注2) は第1回、\*は第1回と第2回、は第3回到該当項目なし。

注3) ( )内はサンプル数。

割を切っている。「学校の授業の復習」をあげるのは33.6%とおよそ3分の1であり、この数値を「学校の授業の予習」と比較すると、復習ではなく予習中心という高校生の家庭学習の特徴が浮び上がってくる。

「塾や予備校の授業の予習・復習」「通信教育」「家庭学習教材」をあげる者は、いずれも1割台かそれ以下であり、高校生の学習が学校の授業中心であることを示している。「書店などで売っている問題集・参考書」は10.5%である。

時系列的にみると、「学校の授業の予習」が大幅に増加し（第1回55.1% 第2回59.2% 第3回64.5%）、「学校の授業の復習」がわずかに減少した（36.7% 39.1% 33.6%）。予習中心の傾向がますます強まった。なお、絶対値は小さいものの、「宅配の

家庭学習教材」は低下傾向にある（3.3% 2.1% 1.2%）。

家での勉強内容には、学校ランクによる差がみられる。もっとも対照的なのは上位ランク校と下位ランク校である。上位ランク校の高校生ほど、「学校の授業の予習」「学校の授業の復習」「塾や予備校の授業の予習・復習」「書店などで売っている問題集・参考書」が多い傾向がある。「学校の宿題」と答えた者は、上位ランク校でもっとも少なく、中上位ランク校でもっとも多い。「『進研ゼミ』のような通信教育」は、上位ランク校、中上位ランク校、中下位ランク校では14~15%程度と変わらないが、下位ランク校では6.5%と格段に少なくなっている（表1-1-4）。

表1-1-4 家での勉強内容（学校ランク別）

	(%)			
	上位ランク校 (1462)	中上位ランク校 (824)	中下位ランク校 (619)	下位ランク校 (903)
学校の宿題	77.2	86.3	83.8	81.9
学校の授業の予習	79.4	68.7	56.2	42.1
学校の授業の復習	36.9	32.2	28.8	33.0
塾や予備校の授業の予習・復習	8.3	6.7	4.7	3.4
「進研ゼミ」のような通信教育	15.1	14.4	14.4	6.5
宅配の家庭学習教材	1.3	1.1	1.3	1.2
書店などで売っている問題集・参考書	13.9	8.6	11.8	5.9

注1) 複数回答。

注2) ( )内はサンプル数。

## ⑤家での学習の様子

「あてはまる」「まああてはまる」の合計比率が大きい順に、「出された宿題をきちんとやっていく」(78.8%)、「家族に言われなくても自分から進んで勉強する」(74.5%)、「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」(65.0%)、「自分で興味を持ったことを、学校の勉強に関係なく調べる」(64.2%)、「予習をしてから授業を受ける」(60.9%)と並ぶ。概して、肯定的に家庭での学習態度を評価する回答が目立つ。時系列的にみると、「予習をしてから授業を受ける」「家族に言われなくても自分から進んで勉強する」「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」「出された宿題をきちんとやっていく」と答えた生徒が増加した。

### Q

家での勉強についてうかがいます。

7割以上の生徒が「あてはまる」あるいは「まああてはまる」と回答したのは、「出された宿題をきちんとやっていく」(78.8%)と「家族に言われなくても自分から進んで勉強する」(74.5%)である(図1-1-19)。これに続いて、6割程度の生徒が肯定したのは、「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」(65.0%)、「自分で興味を持ったことを、学校の勉強に関係なく調べる」(64.2%)、「予習をしてから授業を受ける」(60.9%)、「ラジオやテレビ、CDをつけっ放しで勉強する」(58.0%)の4項目である。概して、肯定的に家庭での学習態度を評価する回答が目立つ。

「机に向かったら、すぐに勉強にとりかかる」(42.1%)、「計画を立てて勉強する」(39.1%)は4割程度の生徒がそう答えている。肯定率が低かったのは、「授業で習ったことを、自分でもっと詳しく調べる」(24.3%)と「授業で習ったことは、その日のうちに復習する」(23.6%)である。

第3回調査で新たに設問を加えた「『勉強は学校だけですればいい』と思う」は、「あてはまる」9.5%、「まああてはまる」27.5%、「あてはまらない」61.8%であった。6割を

超える生徒が、学校以外の場所でも学習する必要性を認識している。

学校ランク別に差がみられたのは、この「『勉強は学校だけですればいい』と思う」1項目だった(図1-1-20)。下位ランクの高校ほど、「あてはまる」と「まああてはまる」とする者が多い傾向が明確に出ている。家庭での学習頻度や学習時間と符合した結果が出ている。

第1回調査から第3回調査にかけて、目立った変化がみられたのは、図1-1-21にあげた4項目であった。「予習をしてから授業を受ける」と答えた生徒は第1回47.5%、第2回51.8%、第3回60.9%と増加した。「家での学習内容」(前項)においてみられた予習の増加と一致した結果である。

「家族に言われなくても自分から進んで勉強する」(69.0%、71.1%、74.5%)、「嫌いな科目の勉強も一生懸命する」(45.9%、56.1%、65.0%)、「出された宿題をきちんとやっていく」(73.1%、74.2%、78.8%)の3項目についても増加傾向がみられる。宿題はもちろん、嫌いな科目も一生懸命に、より自主的に学習するようになった。

図1-1-19 家での学習の様子

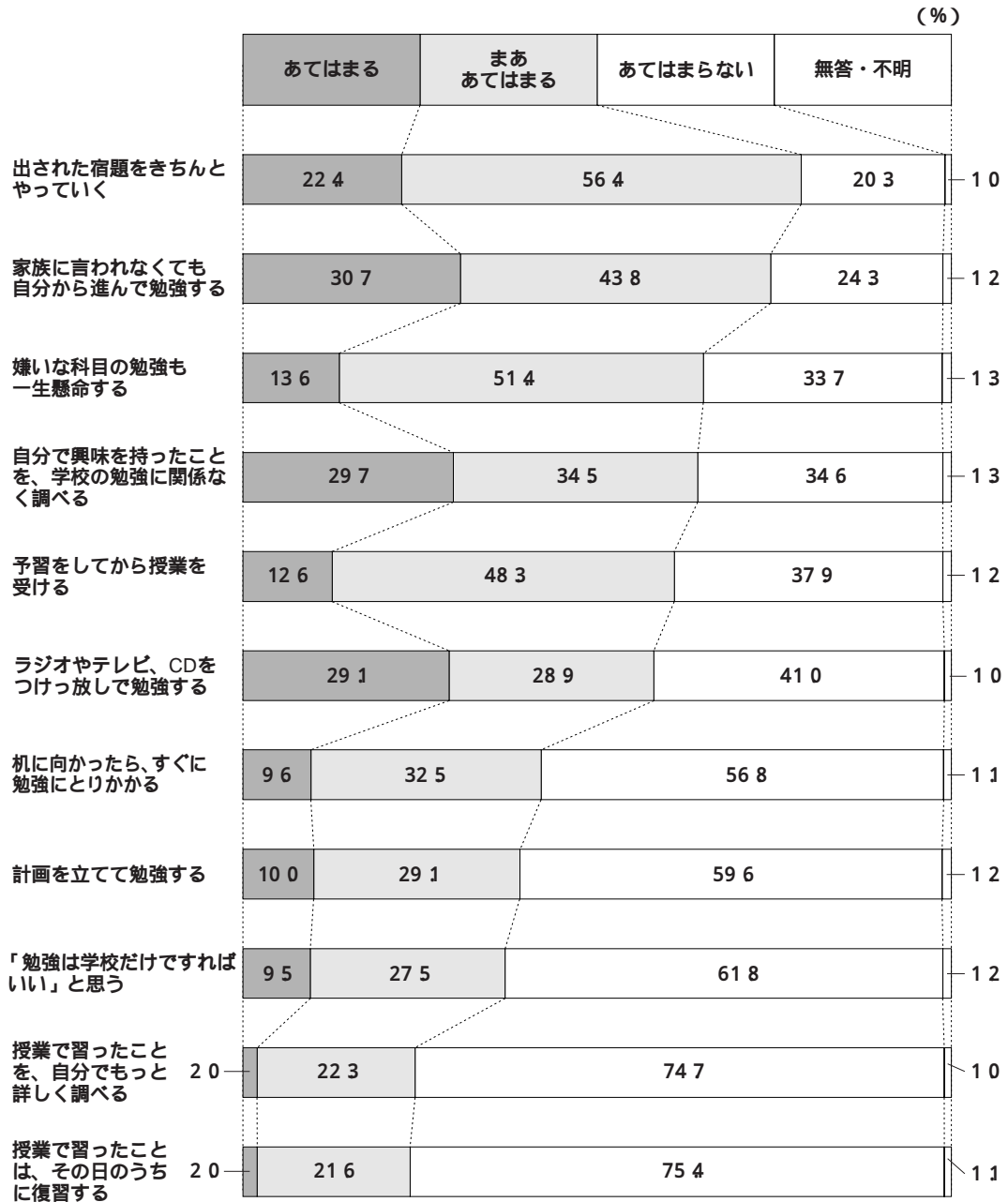


図1-1-20 「『勉強は学校だけですればいい』と思う」(学校ランク別)

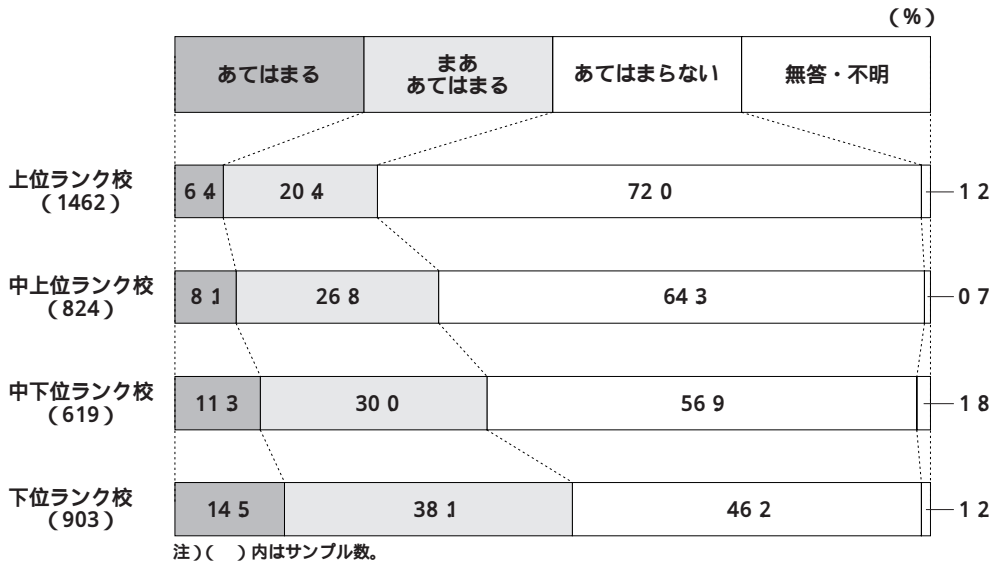
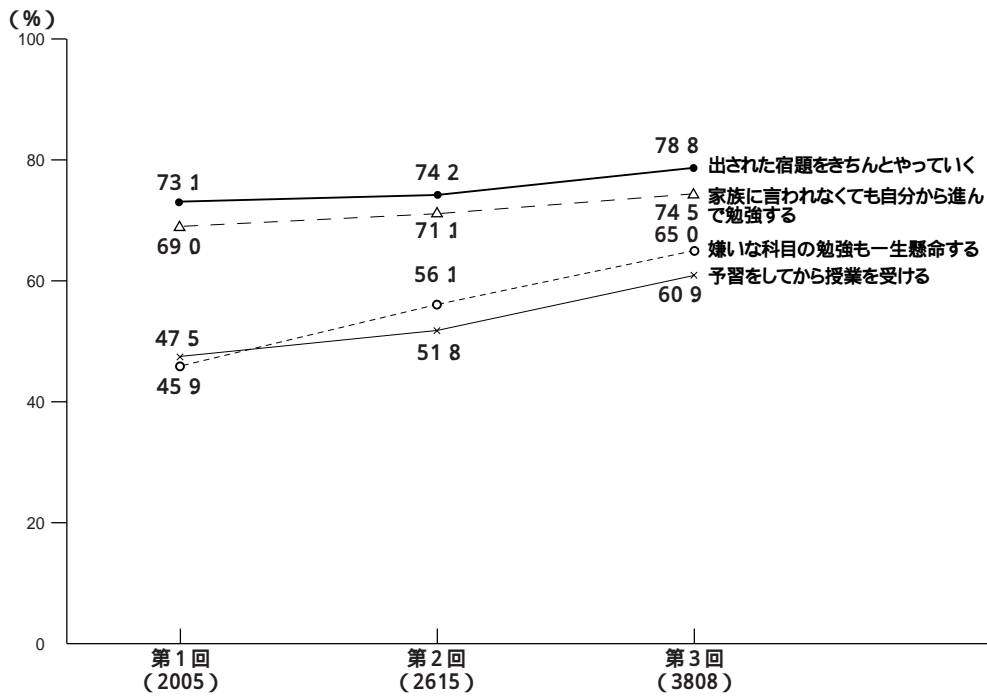


図1-1-21 家での学習の様子(時系列)



注1) 数値は「あてはまる」と「まああてはまる」の合計。

注2) ( )内はサンプル数。

## ⑥日常生活の中での「学習」

第1回調査と比較してみると、頻度が小さくなったのは「新聞のニュース欄を読む」(71.6% 52.7%)、「歴史小説や歴史の本を読む」(30.5% 22.2%)、「読みたい本を本屋で探して買う」(67.4% 61.0%)などである。ことに、新聞のニュース欄を読む高校生は激減した。



あなたは、ふだん(学校の授業や宿題以外で)次のことをどのくらいしますか。

高校生の学業達成や学習内容の理解度は、授業を聞いたり、学校の宿題や予習、復習をしたり、あるいは塾や予備校で受験勉強をしたりといった、直接学校の学習にかかわる行動だけに規定されているわけではない。そこには、そうした行動の背景にあって学業達成や理解度を左右するさまざまな要因が存在する。ここでは学業達成や理解度にかかわるけれども、直接的には学校の学習にかかわらない諸行動を「日常生活の中での『学習』」としてとらえ、その状況をみることにする。「学力の裾野」と言い換えてもよい。学校での学業達成や授業の理解は、そうした日常的な知的行動や情報の摂取、知的関心に基礎づけられてはじめて高められるものと考えられることができる。

具体的には、図1-1-22にあげた項目を用い、それぞれについて学校の授業や宿題以外での行動の頻度を尋ねた。

高校生の半数以上が「よくする」「時々する」と答えたのは、以下の2項目である。

- ①「読みたい本を本屋で探して買う」(61.0%)
- ②「新聞のニュース欄を読む」(52.7%)

逆に、回答率が3割以下であり、多くの高校生にとってなじみが薄い行動は次のもので

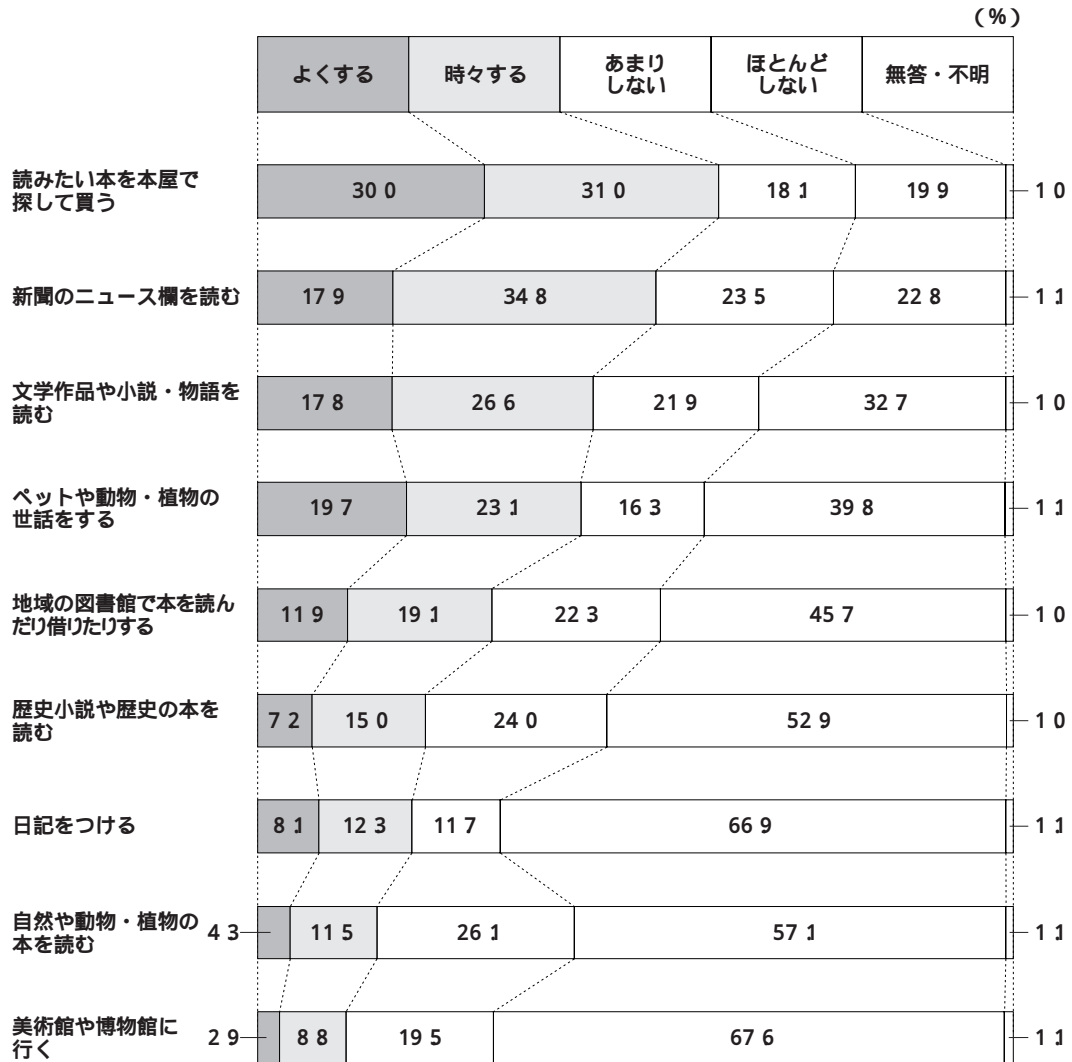
ある。

- ①「美術館や博物館に行く」(11.7%)
- ②「自然や動物・植物の本を読む」(15.8%)
- ③「日記をつける」(20.4%)
- ④「歴史小説や歴史の本を読む」(22.2%)

こうした行動については、受験勉強などの目的を絞った学習にとっては迂遠でありむしろ非効率的であると考えられがちだが、その重要性をよく認識した上で、指導がなされることが望ましいと思われる。生涯学習時代の到来を考慮すれば、学校での授業や受験に焦点づけられた学習以上に、図にあげた諸学習行動の習慣の形成のほうが重要性が大きいと考えられる。

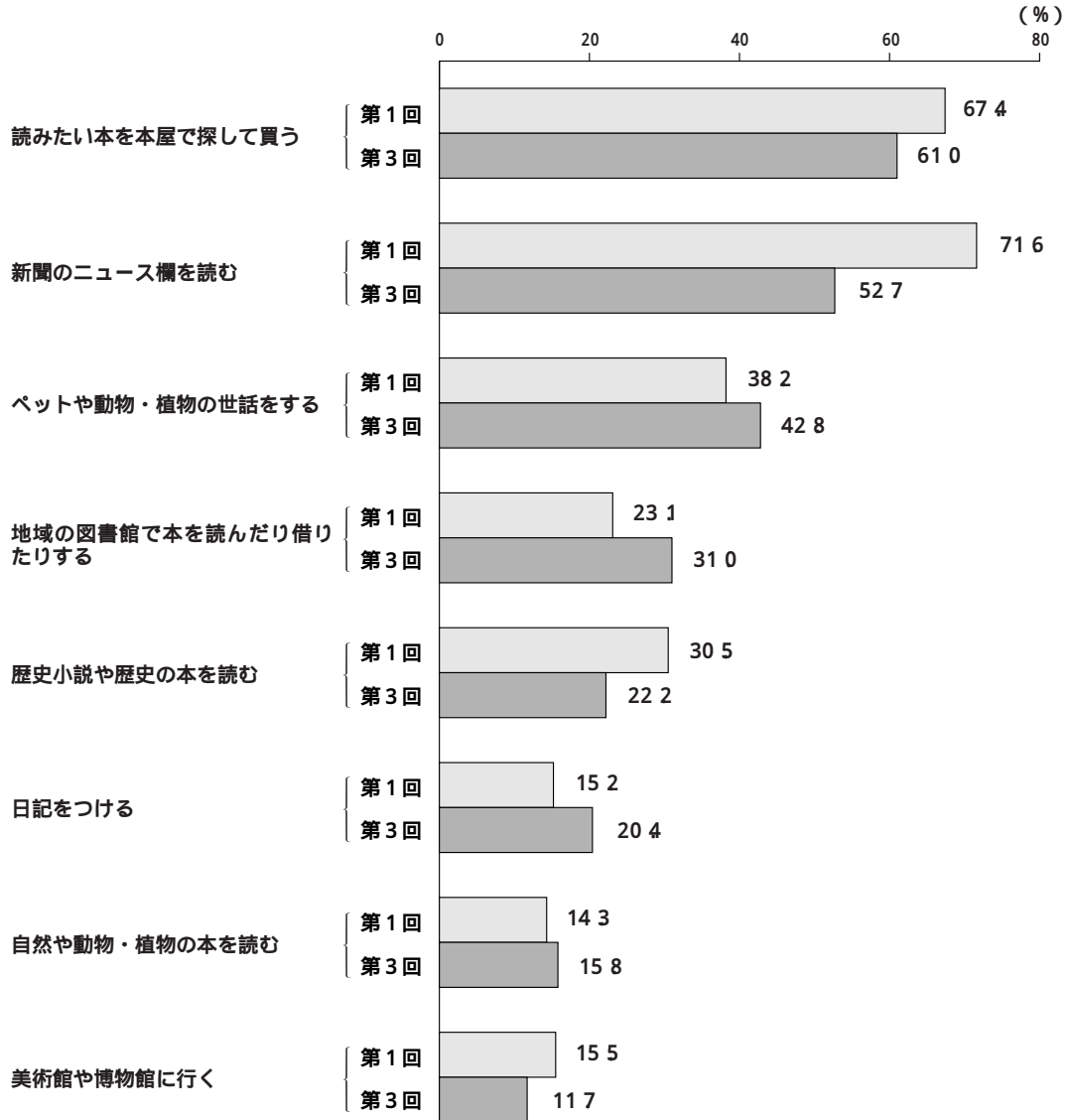
以上の結果を、第1回調査と比較してみよう。第1回調査と比較してより頻度が大きくなったのは、「地域の図書館で本を読んだり借りたりする」(23.1% 31.0%)と、「日記をつける」(15.2% 20.4%)の2つである。逆に、頻度が小さくなったのは、「新聞のニュース欄を読む」(71.6% 52.7%)、「歴史小説や歴史の本を読む」(30.5% 22.2%)、「読みたい本を本屋で探して買う」(67.4% 61.0%)である。ことに、新聞のニュース欄を読む高校生は激減した(図1-1-23)。

図1-1-22 日常生活の中での「学習」



注) サンプル数は3808人。

図1-1-23 日常生活の中の「学習」(時系列)



注1) 数値は「よくする」と「時々する」の合計。

注2) 第2回は該当項目なし。

注3) サンプル数は第1回2005人、第3回3808人。

## 7 家庭環境

保護者の高学歴化を示す項目で変化が大きい。さらに、「ほとんど毎日、家の人は私に『勉強しなさい』と言う」は、第1回調査22.1%から第3回調査16.2%へと減少している。



あなたの家のことについてうかがいます。

この項の最後に、生徒の学習を取り巻く、家庭の文化的環境や保護者の学業関心などについて、時系列的に比較した結果をみておこう。

もっとも目立った変化は、保護者からの勉強に関するプレッシャーが弱くなってきたことを示唆する変化である。「ほとんど毎日、家の人は私に『勉強しなさい』と言う」は、

第1回調査22.1%から第3回調査16.2%へと減少している。

また、全般的な高学歴化を反映して、大卒の父親の比率は29.0%（第1回）から45.6%（第3回）へ、また大卒・短大卒の母親の比率も18.2%から37.9%へと増加した（表1-1-5）。

表1-1-5 家庭の文化的環境（時系列）

(%)

	第1回(2005)	第2回(2615)	第3回(3453)
家には本(マンガや雑誌以外)がたくさんある	53.4	54.6	51.5
自分一人の勉強部屋を持っている	74.4	78.1	76.3
ほとんど毎日、家の人は私に「勉強しなさい」と言う	22.1	20.7	16.2
この1か月の間に、お父さんやお母さんに勉強をみてもらったことがある	—	—	7.9
お父さんやお母さんとよく話をする	—	—	63.3
お母さんは私の成績をよく知っている	72.2	66.4	72.2
お父さんは私の成績をよく知っている	45.5	42.0	45.1
家の人に博物館や美術館に連れていってもらったことがある	38.0	38.8	37.9
お父さんは大学を卒業している	29.0	35.2	45.6
お母さんは大学や短期大学を卒業している	18.2	26.0	37.9

注1) —は該当項目なし。

注2) ( )内はサンプル数。第3回は、回答を拒否した355名を除外して計算した。

### 3. 学校外の学習機会

#### ① 学習塾・予備校の利用

放課後や日曜日に学習塾、予備校に通っているのは、全体で19.8%。第1回調査12.7%、第2回調査15.0%、第3回調査19.8%と着実な上昇傾向にある。塾の種類は「進学塾」が46.1%、「補習塾」が40.5%とほぼ拮抗している。1クラスの人数は、「5人以上」が50.5%とおよそ半数を占め、「少人数(2~4人)」が23.7%、「個別指導(1人)」は21.5%である。週2日が平均的な通塾日数であり、大半が3日以内となっている。

Q

あなたは今、放課後や日曜日に、学習塾や予備校に行っていますか(そろばん、習字などの塾は除きます。「公文」のような自習教室は含めません)。

[行っている人にうかがいます]

週に何日行っていますか。

あなたの行っているのは、どんな学習塾(予備校)ですか。

あなたが行っている学習塾(予備校)は1クラス何人ですか。

本項では、学校以外の学習機会の利用状況を明らかにするために、「学習塾や予備校」「通信教育」「家庭学習教材」「家庭教師」などの利用度を尋ねてみた。

まず、放課後や日曜日の学習塾や予備校の利用状況である。全体的には「通っている」者は19.8%と2割にすぎず、少数派である(図1-1-24)。ただし、時系列的にみると、第1回調査12.7%、第2回調査15.0%、第3回調査19.8%と着実な上昇傾向をみることができる。通塾率の低さは、高校生の学習行動上の特徴の1つで、中学生、小学生の通塾率を下回っている。家庭での学習の内容も高校生の場合、学校の宿題、予習、復習などに限定されており、それだけ高校生の学習に占める学校のウエイトは大きいといえる。学校外学習機会への依存度が小さい。

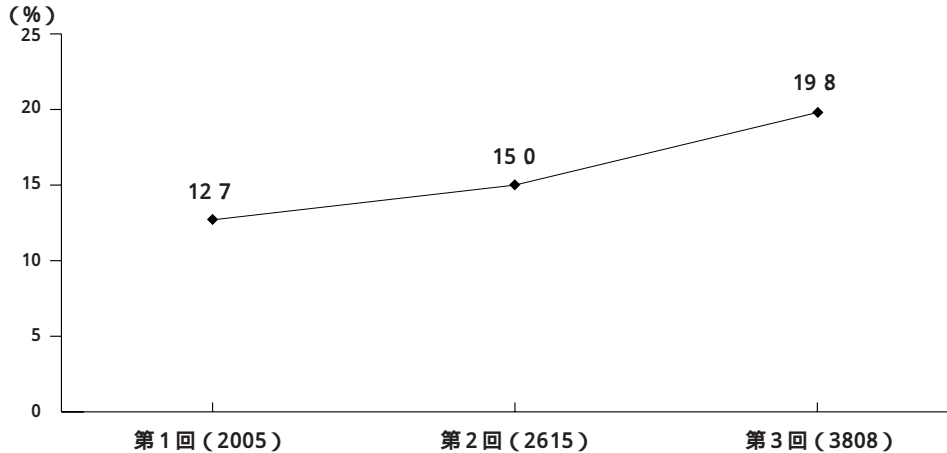
通塾している場合、どんな塾(予備校)に何日くらい通っているのかを示したのが、表

1-1-6である。塾の種類としては、「大学や短期大学を受験するための進学塾」が46.1%と最も多く、わずかな差で「学校の勉強がわかるようになるための補習塾」(40.5%)が続く。1クラスの人数は、「5人以上」が50.5%とおよそ半数を占め、「少人数(2~4人)」が23.7%、「個別指導(1人)」は21.5%である。

週あたりの通塾日数は、最頻値が「2日」で44.5%、「1日」が27.0%、「3日」が17.0%である。週2日が平均的な通塾日数であり、大半が3日以内となっている。

3日以上通塾している者の比率は、第1回調査20.1%、第2回調査17.9%、第3回調査25.9%である。第1回調査と比較すると数%、第2回調査と比べると1割弱多くなっている。通塾率自体が増加しただけでなく、週あたりの通塾日数もやや増加傾向にある。

図1-1-24 学習塾や予備校の利用率(時系列)



注1) 放課後や日曜日の、学習塾や予備校の利用率。ただし、習字などの塾は除き、「公文」のような自習教室を含む。  
注2) ( )内はサンプル数。

表1-1-6 学習塾や予備校の利用状況(時系列)

		(%)		
		第1回 (254)	第2回 (391)	第3回 (755)
週に何日行っているか	1日	28.3	26.1	27.0
	2日	48.0	48.8	44.5
	3日	13.4	10.0	17.0
	4日	5.5	5.1	5.4
	5日	0.0	1.0	2.1
	6日	0.8	0.5	0.9
	7日(毎日)	0.4	1.3	0.5
学習塾(予備校)のタイプ	学校の勉強がわかるようになるための補習塾	44.5	35.8	40.5
	大学や短期大学を受験するための進学塾	44.9	46.8	46.1
	その他	6.7	10.0	10.3
1クラスの人数	1クラスに1人(個別指導)	—	—	21.5
	1クラスに2~4人	—	—	23.7
	1クラスに5人以上	—	—	50.5

注1) 「1クラスの人数」は、第3回調査のみの項目。

注2) ( )内はサンプル数。

## ② 諸学習機会の利用

「今年の夏休みに、学校が行う補習授業を受ける予定だ」が45.7%と圧倒的に多く、これに「『進研ゼミ』のような通信教育を受けている」19.5%、「学校で朝や放課後の補習授業を受けている」19.3%が次ぐ。「今年の夏休みに、塾や予備校の夏期講習に行く予定だ」は15.3%で、第1回調査と比較して倍増した。



あなたは次のようなことをしていますか。

「通信教育」「家庭教師」「塾や予備校の夏期講習」「宅配の家庭学習教材」や「学校の補習授業」についてはどの程度の利用がみられるだろうか。学校の補習授業は、学校が行う指導であるという意味では学校外の学習機会には含まれないが、学校による正規の教育課程ではないこと、さらに通信教育等の学校外学習機会とトレード・オフ関係にあると推測されるため、ここでは比較分析を行った。なお補習授業については、(1)朝や放課後、(2)夏休みの補習に分けて尋ねた。

全体としてみると(図1-1-25)、「今年の夏休みに、学校が行う補習授業を受ける予定だ」が45.7%と圧倒的に多く、これに「『進研ゼミ』のような通信教育を受けている」19.5%、「学校で朝や放課後の補習授業を受けている」19.3%が次ぐ。「今年の夏休みに、塾や予備校の夏期講習に行く予定だ」は15.3%であるが、「宅配の家庭学習教材をとっている」2.5%と「家庭教師についている」2.6%はいずれも少数である。

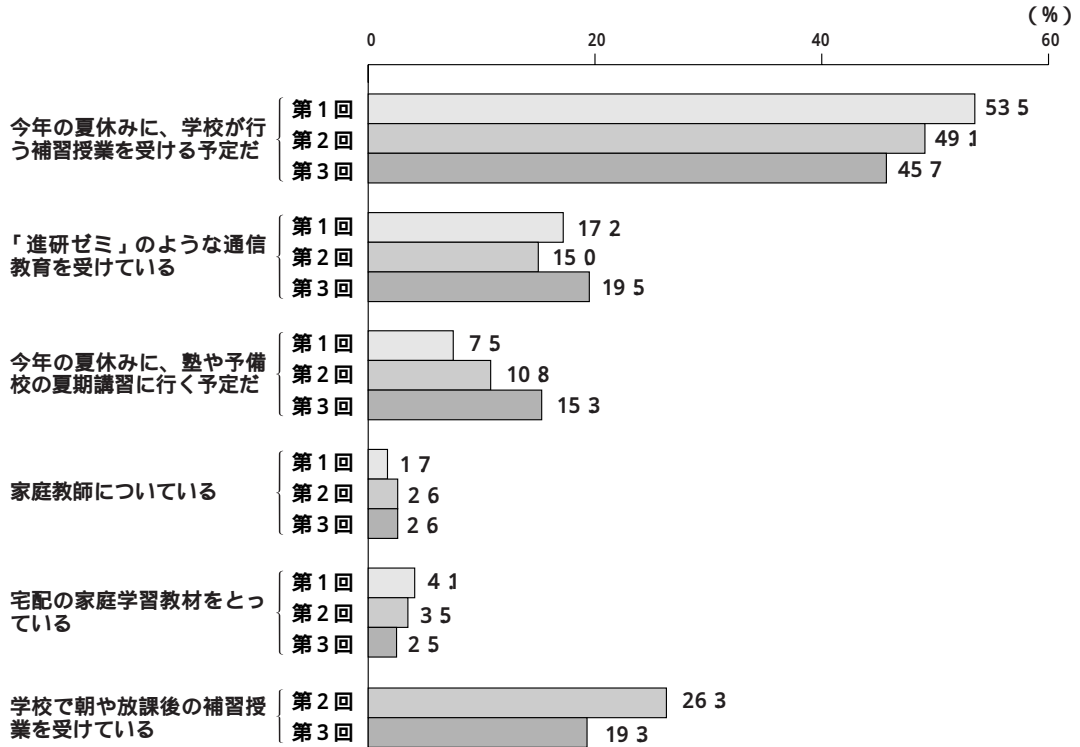
第1回・第2回調査と比較すると、以下の傾向がみられる。

- ①「夏休みの学校補習」「朝や放課後の補習」が減少傾向にある。
- ②「夏休みの塾・予備校の夏期講習」は、第1回調査と比較して倍増した。
- ③「通信教育」は横ばい、「宅配の家庭学習教材」は減少傾向にある。

学校中心の高校生の学習ではあるが、塾と予備校の比重が徐々に大きくなりつつあることがわかる。

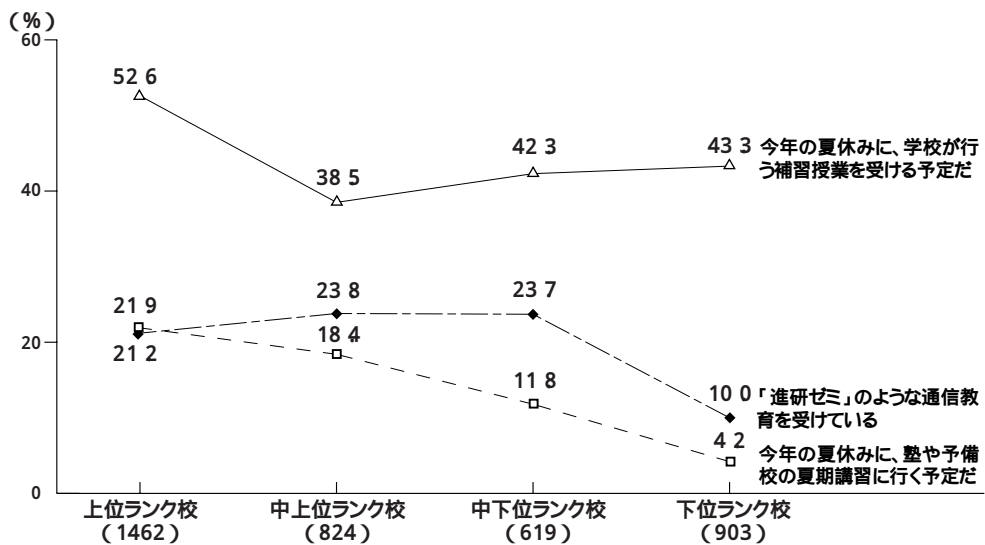
- これらの学習機会の利用率は、学校ランク別にみて大きく異なっており、次のような傾向がある(図1-1-26)。
- ①「夏休みの学校補習」は上位ランク校で高く5割を超えるが、他は4割前後である。
  - ②「塾・予備校の夏期講習」は、学校ランクが下がるにつれて利用率が低下する。上位ランク校21.9%に対して下位ランク校は4.2%にすぎない。
  - ③通信教育は、上位ランク校から中下位ランク校まではほとんど差がなく2割強の利用率を示すが、下位ランク校では1割となる。
- 総じて、上位ランク校の生徒ほど、補習と学校外学習機会の利用率が高い。

図1 - 1 - 25 諸学習機会の利用（時系列）



注1) 複数回答。  
 注2) 第1回は第1回に該当項目なし。  
 注3) サンプル数は第1回2005人、第2回2615人、第3回3808人。

図1 - 1 - 26 諸学習機会の利用（学校ランク別）



注1) 複数回答。  
 注2) ( )内はサンプル数。

## 4 . 学習の方法

### ①学習の方法

高校生の学習方法は、ここ約10年間に、次のように変化した。①「教科書やテキストをくり返し読む」が大幅に増加、②「教科書や参考書を整理して自分のノートを作る」がやはり大きく増加、③「辞書（英語・国語など）を引く」が減少、④「教科書ガイドを使う」が減少した。



家では、どんな勉強の仕方をする人が多いですか。

次節でみるように、高校生の学習をめぐる最大の悩みの1つは、上手な勉強の仕方がわからないことにある（p.74参照）。そこで、家でどんな勉強の仕方をする人が多いのかを尋ねてみた（図1-1-27）。

高校生のおよそ半数以上が「よくする」「時々する」と答えているのが、①「プリントや問題集で数学の問題練習をする」（79.7%）②「教科書やテキストをくり返し読む」（68.1%）③「英単語をくり返し書いて覚える」（66.8%）④「教科書や参考書にアンダーラインを引いたり、カラーマーカーを塗る」（66.5%）⑤「辞書（英語・国語）を引く」（62.6%）⑥漢字をくり返し書いて覚える（60.1%）⑦「教科書や参考書を整理して自分のノートを作る」（49.0%）である。「参考書を読む」は42.2%と、問題集と比べると少ない。

逆に、3割程度かそれ以下の者しかとっていない学習方法は、「自分で単語帳・単語カードを作って暗記する」（30.3%）「教科書ガイドを使う」（30.0%）「図鑑や事典で調べる」（17.1%）「市販の単語帳・単語カードを暗記する」（14.6%）である。

学習の方法は、どういう学校に在学しているかによっても差が存在する（表1-1-7）。

学校ランク別にみると、上位ランクの高校生ほど「参考書を読む」傾向が強く、また「辞書（英語・国語など）を引く」とする者が多くなっている。これに対して、下位ランクの高校生に特徴的なのは、「教科書や参考書を整理して自分のノートを作る」「英単語をくり返し書いて覚える」「漢字をくり返し書いて覚える」の3項目である。「くり返し」は下位ランクの高校生により多くみられる学習方法である。

これらを時系列的に比較すると、次のような変化がみられる（図1-1-28）。

- ①「教科書やテキストをくり返し読む」が第1回調査47.7%から第3回調査68.1%へと大幅に増加。
- ②「教科書や参考書を整理して自分のノートを作る」が同様に35.1%から49.0%へと大きく増加。
- ③「辞書（英語・国語など）を引く」が、75.8%から62.6%へと減少。
- ④「教科書ガイドを使う」が44.2%から30.0%へと減少。

図1-1-27 学習の方法

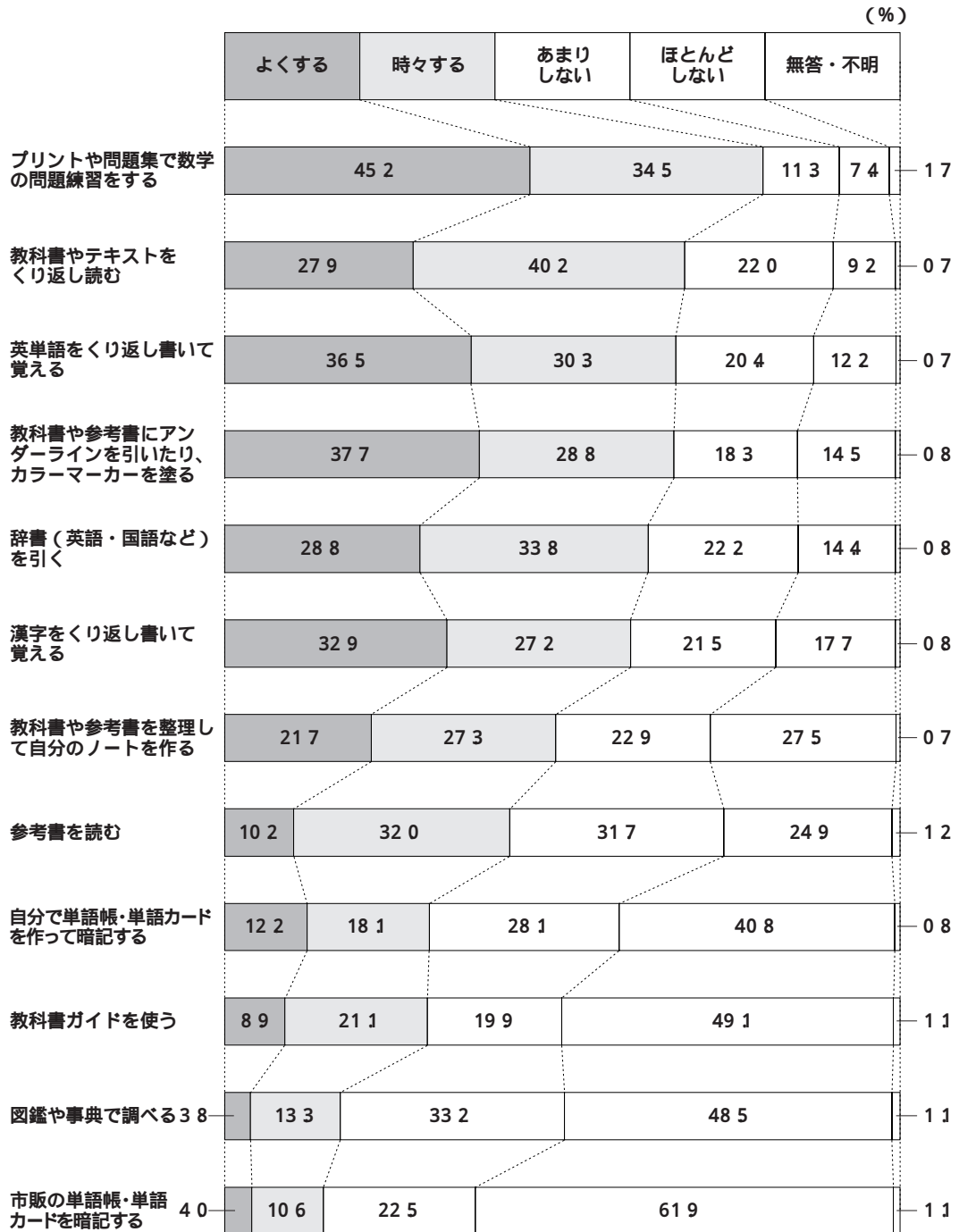


表1 - 1 - 7 学習の方法（学校ランク別）

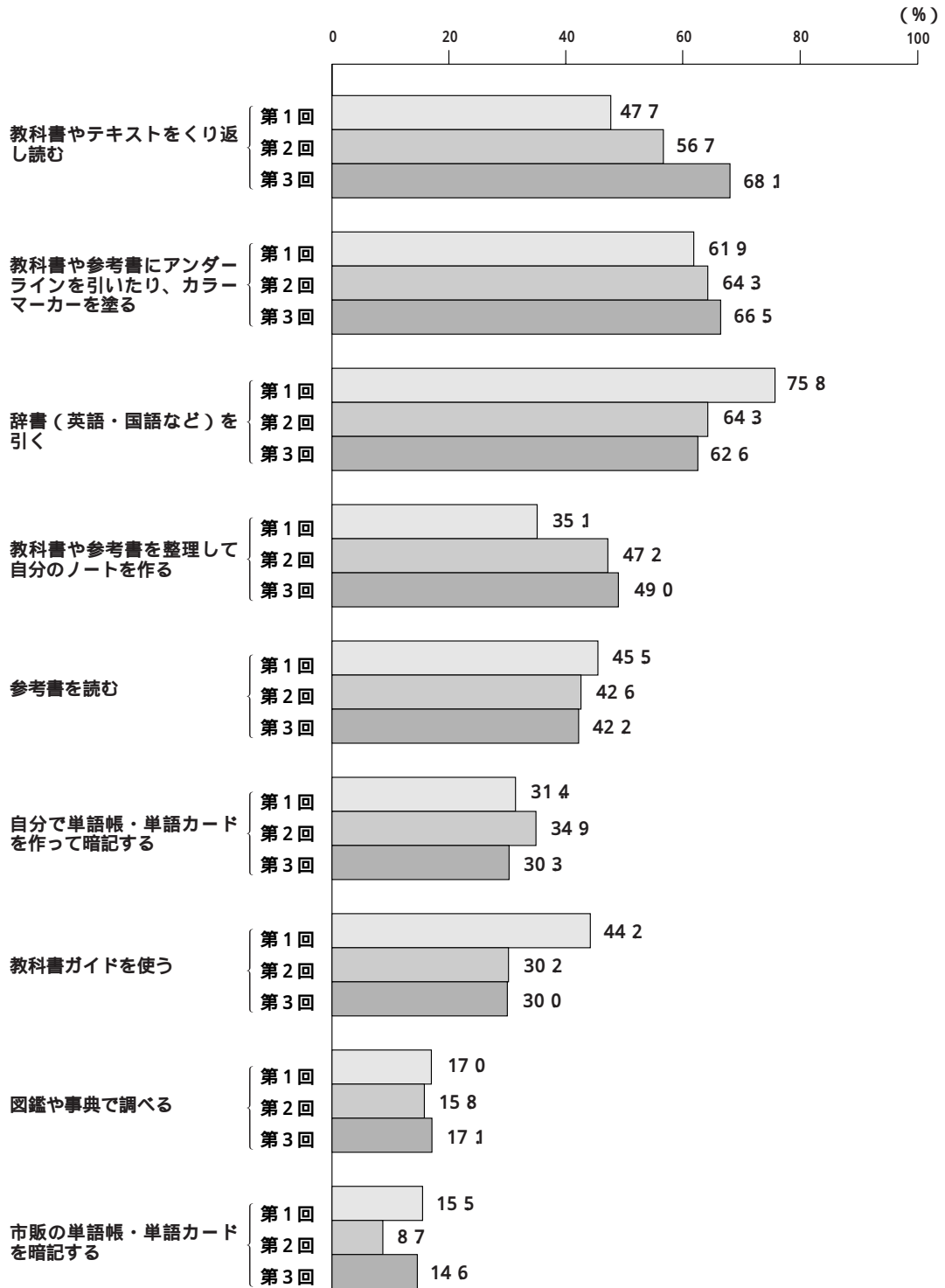
（％）

		全体 (3808)	学校ランク			
			上位ランク校 (1462)	中上位ランク校 (824)	中下位ランク校 (619)	下位ランク校 (903)
参考書を読む	よくする	10.2	12.5	10.7	9.7	6.2
	時々する	32.0	38.5	33.7	27.3	23.3
	あまりしない	31.7	28.0	32.3	32.3	36.8
	ほとんどしない	24.9	19.9	22.8	28.4	32.3
	無答・不明	1.2	1.1	0.5	2.3	1.4
辞書（英語・国語など）を引く	よくする	28.8	42.3	25.5	21.3	15.0
	時々する	33.8	32.8	39.1	35.1	29.7
	あまりしない	22.2	16.0	22.5	25.0	30.0
	ほとんどしない	14.4	8.3	12.5	16.6	24.5
	無答・不明	0.8	0.5	0.5	1.9	0.9
教科書や参考書を整理して自分のノートを作る	よくする	21.7	15.7	20.4	30.2	26.9
	時々する	27.3	25.6	26.3	31.0	28.2
	あまりしない	22.9	26.0	22.9	18.1	21.2
	ほとんどしない	27.5	32.3	30.0	19.4	22.9
	無答・不明	0.7	0.5	0.4	1.3	0.8
英単語をくり返し書いて覚える	よくする	36.5	30.2	44.4	34.9	40.6
	時々する	30.3	28.4	30.7	32.3	31.5
	あまりしない	20.4	24.6	16.1	19.9	17.6
	ほとんどしない	12.2	16.3	8.4	11.1	9.7
	無答・不明	0.7	0.5	0.4	1.8	0.6
漢字をくり返し書いて覚える	よくする	32.9	28.5	36.8	28.6	39.2
	時々する	27.2	25.6	25.0	27.9	31.0
	あまりしない	21.5	21.9	21.1	24.6	19.2
	ほとんどしない	17.7	23.3	16.7	17.0	10.1
	無答・不明	0.8	0.6	0.4	1.9	0.6

注1) 差のある項目のみ抽出。

注2) ( )内はサンプル数。

図1 - 1 - 28 学習の方法（時系列）



注1) 数値は「よくする」と「時々する」の合計。

注2) サンプル数は第1回2005人、第2回2615人、第3回3808人。

## ②学習方法のタイプ

高校生に支配的な学習方法は、①「通信教育、学習塾の教材や自分で買った教材中心」(8.0%)よりも「学校で使う教材中心」(91.1%)、②「市販の要点整理などを使う」(14.2%)よりも「自分で整理しながら勉強する」(84.6%)、③「毎日こつこつ勉強する」(16.3%)よりも「試験の前にまとめて勉強する」(83.2%)である。ここ約10年間で、高校生の学習は、「予習中心」派がほぼ半数近くまで増加し、また「問題集中心」の傾向に拍車がかかった。上位ランクの高校生の学習方法の特徴を示すキーワードは、「こつこつ・じっくり・読む」である。

### Q

あなたの勉強の仕方を分類するとすれば、どんなタイプになると思いますか。どちらかといえば近いほうのタイプに をつけてください。

(1か2のどちらか近いほうの番号に をつけてください)

高校生の学習方法のタイプを明らかにするために、この調査ではやや変わった設問方法を試みている。2つの勉強の仕方をペアにして(たとえば「問題集中心」と「参考書中心」)そのどちらのほうに自分が近いのかを強制的に分類してもらう方法である。

回答傾向から次のようなことがわかる(図1-1-29)。

#### 回答が一方に偏るタイプ

ペアにされた勉強方法のうち回答が一方に偏ったのは次のものである。ここでは8割以上が一方を選択したものをあげた。これらについては、高校生全体について一方の勉強方法が支配的であるとみることができる。

- ①「通信教育、学習塾の教材や自分で買った教材中心」(8.0%)よりも「学校で使う教材中心」(91.1%)
  - ②「市販の要点整理などを使う」(14.2%)よりも「自分で整理しながら勉強する」(84.6%)
  - ③「毎日こつこつ勉強する」(16.3%)よりも「試験の前にまとめて勉強する」(83.2%)
- 学校で配付される教材を中心に、試験の前にまとめて、自分で整理しながら勉強する方法が、支配的である。

#### 回答が拮抗しているタイプ

- ①「復習中心」(52.1%) 「予習中心」(47.1%)
  - ②「得意な科目中心」(56.8%) > 「苦手な科目中心」(42.1%)
  - ③「できるだけ暗記しようとする」(57.0%) > 「できるだけ考えようとする」(42.2%)
- これらについては、回答が拮抗(数値の差が2割以内)している。復習派と予習派はほとんど変わらない。

#### 上記2グループの間

- ①「解説がていねいな参考書を読む」(60.1%) > 「要点だけ簡単にまとめたものを読む」(38.7%)
- ②「わからないところは、先生や友だちに聞く」(62.4%) > 「わからないところは、自分で考える」(36.9%)
- ③「書きながら覚える」(62.8%) > 「読んだり、しゃべりながら覚える」(36.6%)
- ④「やさしい問題を数多く解く」(65.4%) > 「難しい問題をじっくり考える」(33.5%)
- ⑤「書いて覚える」(68.1%) > 「見て覚える」(31.2%)
- ⑥「問題集中心」(76.2%) > 「参考書中心」(22.8%)

時系列的にみると、2つの変化を指摘できる。第一に、「参考書中心」に対して)「問

題集中心」の比率が、第1回調査63.9%から第3回調査76.2%へと大きく伸びた。第二に、「復習中心」に対して「予習中心」が、第1回調査39.3%から第3回調査47.1%へと増加し、「復習中心」派と「予習中心」派がほぼ拮抗するようになった。ここ約10年間で、高校生の学習は、「予習中心」派がほぼ半数近くまで増加し、また「問題集中心」の傾向に拍車がかかった(図1-1-30)。

学習方法のタイプという点で、上位ランクの高校と下位ランクの高校は、まことに対照的である。表1-1-8は学校ランク別に学習方法のタイプの差を示したものだが、これを要約すると次のようになる。

上位ランクの高校ほど相対的に多い学習方

法のタイプ

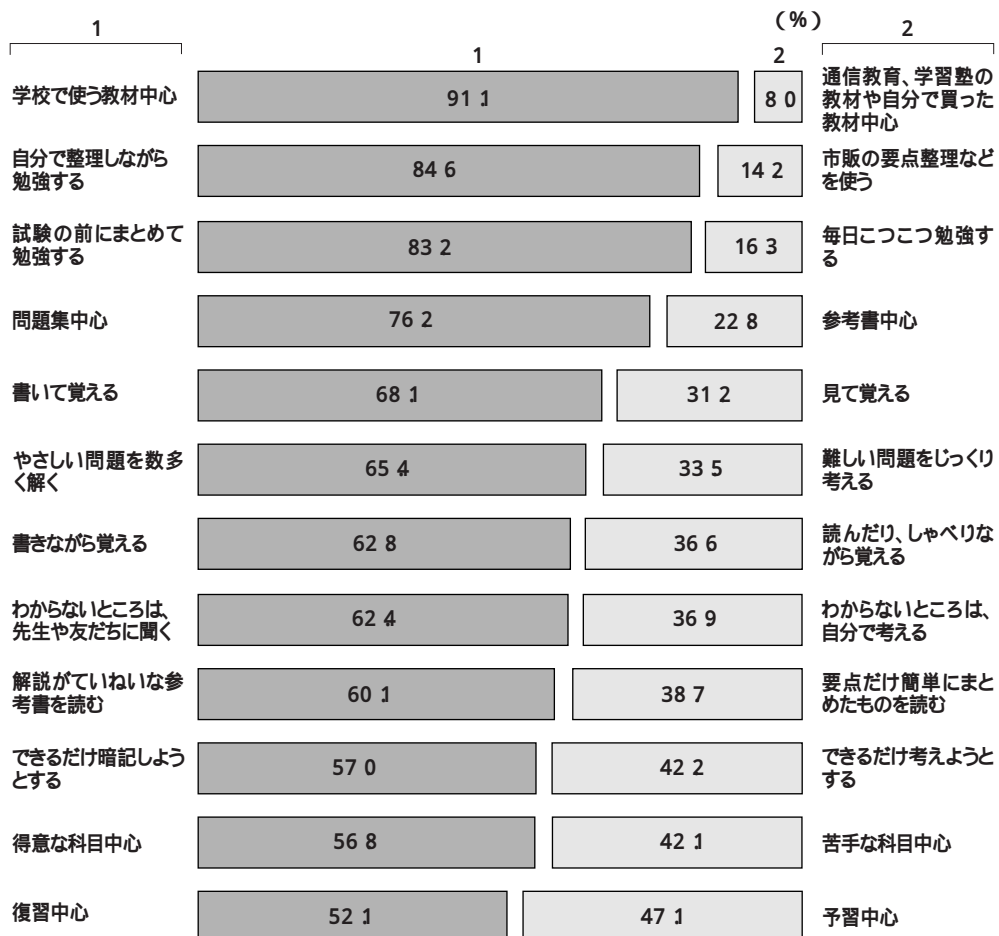
「解説がていねいな参考書」「予習中心」「できるだけ考える」「読んだり、しゃべりながら覚える」「難しい問題をじっくり」「見て覚える」「参考書中心」「毎日こつこつ勉強」

下位ランクの高校ほど相対的に多い学習方法のタイプ

「試験前にまとめて勉強」「問題集中心」「復習中心」「書いて覚える」「やさしい問題を数多く」「できるだけ暗記」「書きながら覚える」「要点だけ簡単にまとめたものを読む」

こうしてみると、上位ランクの高校生の学習方法の特徴を示すキーワードは、「こつこつ・じっくり・読む」である。

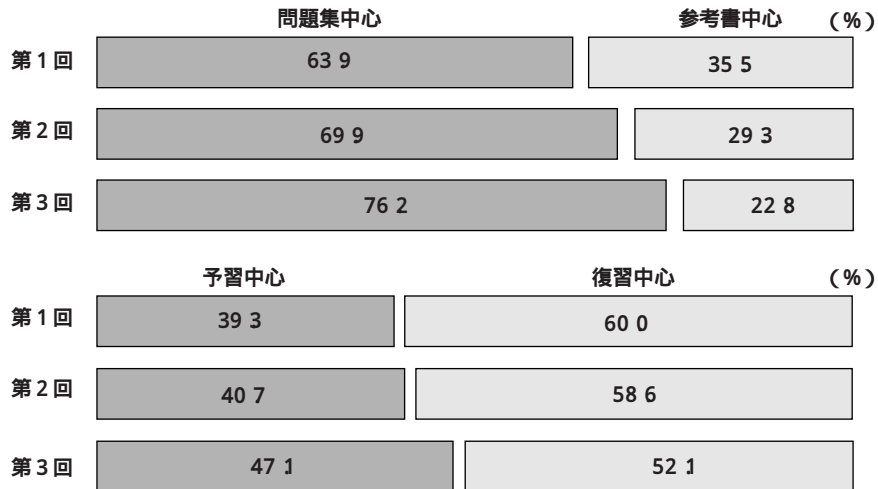
図1-1-29 学習方法のタイプ



注1) 1、2の間の空白部分は「無答・不明」を示す。

注2) サンプル数は3808人。

図1-1-30 学習方法のタイプ(時系列)



注1) 項目間の空白部分は「無答・不明」を示す。

注2) サンプル数は第1回2005人、第2回2615人、第3回3808人。

表1-1-8 学習方法のタイプ(学校ランク別)

(%)

	全体 (3808)	学校ランク			
		上位ランク校 (1462)	中上位ランク校 (824)	中下位ランク校 (619)	下位ランク校 (903)
毎日こつこつ勉強する	16.3	23.1	16.0	12.9	7.8
試験前にまとめて勉強する	83.2	76.5	83.6	86.1	91.6
無答・不明	0.6	0.5	0.4	1.0	0.7
問題集中心	76.2	73.6	74.6	75.8	81.9
参考書中心	22.8	25.5	24.8	22.6	16.6
無答・不明	1.1	0.9	0.6	1.6	1.4
できるだけ暗記しようとする	57.0	50.4	54.2	58.5	69.1
できるだけ考えようとする	42.2	48.5	45.4	40.5	30.1
無答・不明	0.8	1.1	0.4	1.0	0.8
書きながら覚える	62.8	57.8	65.3	65.4	66.9
読んだり、しゃべりながら覚える	36.6	41.7	34.5	33.4	32.3
無答・不明	0.6	0.5	0.2	1.1	0.8
予習中心	47.1	59.2	55.2	38.1	26.1
復習中心	52.1	39.9	44.4	60.6	73.2
無答・不明	0.8	0.9	0.4	1.3	0.7
難しい問題をじっくり考える	33.5	40.9	30.2	27.1	28.7
やさしい問題を数多く解く	65.4	57.7	69.3	71.4	70.2
無答・不明	1.1	1.4	0.5	1.5	1.1
わからないところは、先生や友だちに聞く	62.4	60.4	59.7	64.6	66.4
わからないところは、自分で考える	36.9	38.7	39.9	34.6	32.7
無答・不明	0.8	0.9	0.4	0.8	0.9
書いて覚える	68.1	63.1	68.6	73.5	72.2
見て覚える	31.2	36.3	31.2	25.5	27.0
無答・不明	0.7	0.7	0.2	1.0	0.8
解説がていねいな参考書を読む	60.1	69.5	62.3	52.7	48.0
要点だけ簡単にまとめたものを読む	38.7	29.1	37.1	45.4	51.1
無答・不明	1.2	1.4	0.6	1.9	1.0

注)( )内はサンプル数。

### ③メディアの利用

時系列的にみると、「家でパソコンを使う」(「よくある」+「時々ある」)が第2回調査21.2%から第3回調査55.4%へと急増を示した。これに対して、「学校でパソコンを使う」は9.5%から12.1%へと微増したにすぎない。「家でインターネットを使って何か調べる」は39.1%で、家庭に比べて学校におけるパソコンやインターネットの利用は低調である。



パソコンやテレビなどのメディア(機械)についてうかがいます。

今日、印刷メディア以外にも、電子メディアを中心としてさまざまなメディアが子どもの学習に利用されようとしている。本節の最後に、パソコンなどの広い意味での電子メディア(テレビゲームを含む)の利用状況についてみておきたい。

8項目のうち、「家でパソコンを使う」が55.4%(「よくある」「時々ある」の合計)、「家でインターネットを使って何か調べる」は39.1%であった。家庭におけるパソコンの普及が進み、インターネットを使って調べものをする高校生が4割に達するようになった。

しかし、家庭に比べて学校におけるパソコンやインターネットの利用は低調である。「学

校でパソコンを使う」のは12.1%にすぎず、さらに「学校でインターネットを使って何か調べる」のは4.9%とごくごく少数にとどまる(図1-1-31)。

その他のメディアの利用率は、1割程度かそれ以下ときわめて低い。

時系列的にみると(第2回調査との比較、表1-1-9)、「家でパソコンを使う」が21.2%から55.4%へと急増を示した。これに対して、「学校でパソコンを使う」は9.5%から12.1%へと微増したにすぎない。高校生の学校におけるパソコン利用は、遅々として進んでいない。

図1-1-31 メディアの利用

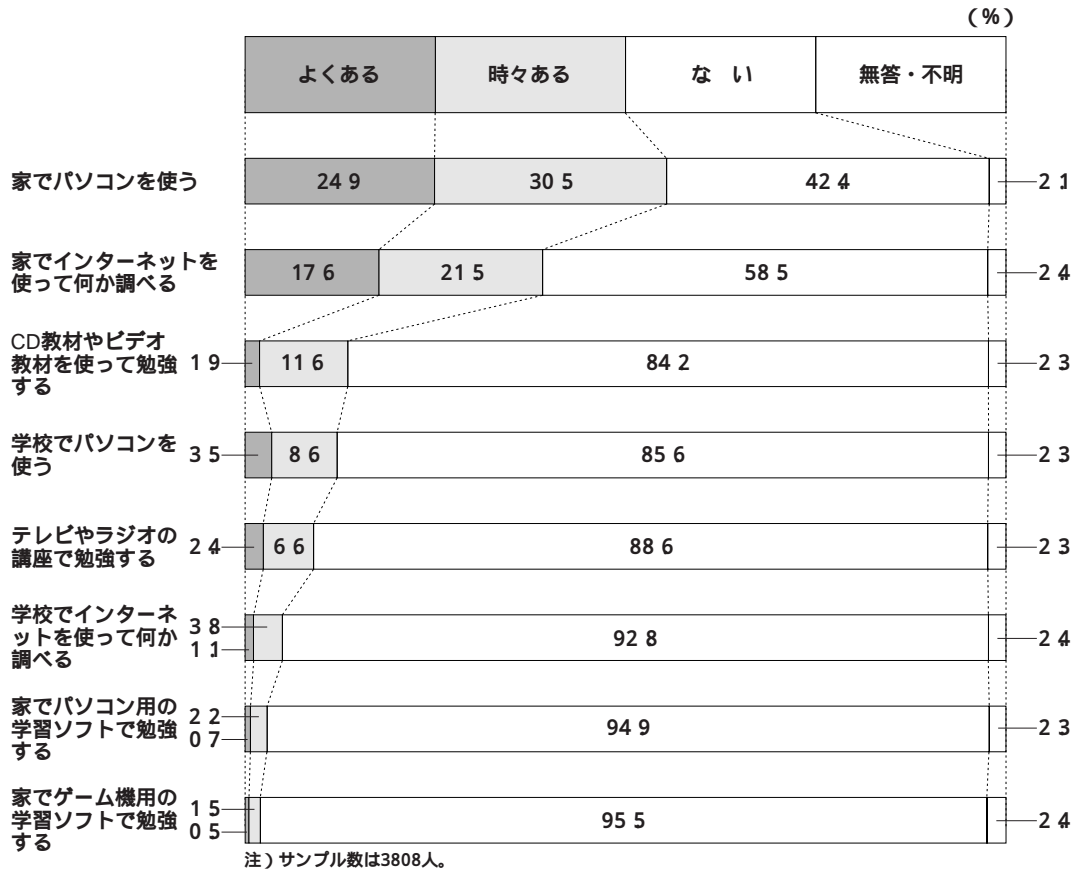


表1-1-9 メディアの利用(時系列)

(%)

		第2回(2615)	第3回(3808)
家でパソコンを使う	よくある	6.5	24.9
	時々ある	14.7	30.5
	ない	77.3	42.4
学校でパソコンを使う	よくある	2.1	3.5
	時々ある	7.4	8.6
	ない	88.8	85.6
家でパソコン用の学習ソフトで勉強する	よくある	0.7	0.7
	時々ある	1.0	2.2
	ない	96.5	94.9
家でゲーム機用の学習ソフトで勉強する	よくある	0.5	0.5
	時々ある	0.6	1.5
	ない	97.1	95.5

注)( )内はサンプル数。

## 第2節 高校生の学習観・成績観

### 1. 成績観

#### ①成績の自己評価

成績の自己評価は、「真ん中」とその前後のカテゴリに6割が集中。「上のほう」よりも「下のほう」に偏った分布を示す。時系列的にみると、第1回調査以降、成績の自己評価は、徐々に下方へとシフトする傾向をみせている。



現在の総合的な成績は、学年の中でどのくらいですか。

「学習に関する意識・実態調査」では、高校生の成績観を、(1)学年の中での総合的な成績の自己評価、(2)どのくらいの成績がとれたらよいか、(3)現在の成績は別として、うんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思うのか、という3つの側面に分けてとらえている。

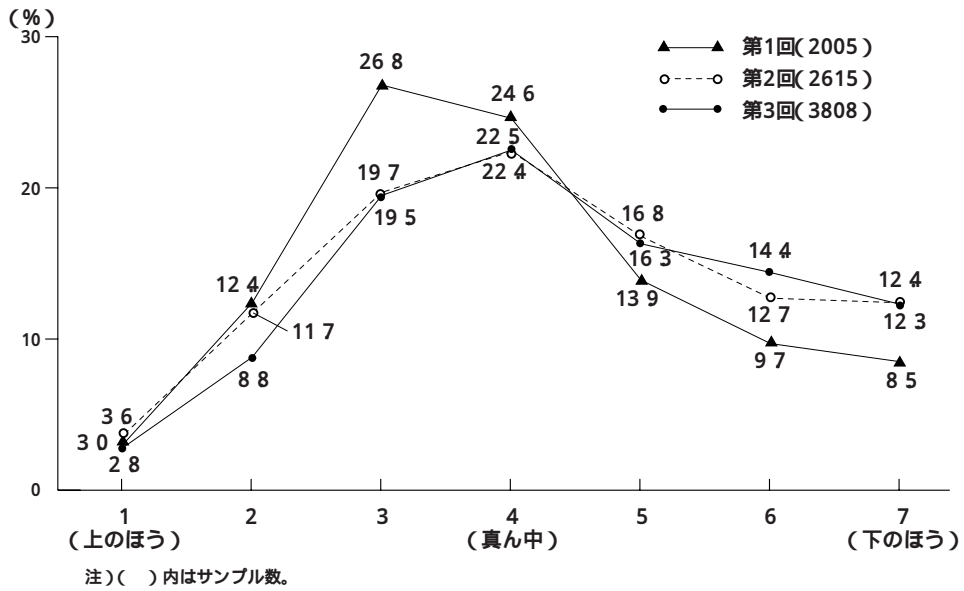
まず、学年の中での総合的な成績の自己評価である(図1-2-1)。選択肢は「1(上のほう)」から「4(真ん中)」を経て「7(下のほう)」まで7段階に分けて、いずれかの段階を選択させた。

全体としてみると、「4(真ん中)」とその前後(「3」および「5」)の3カテゴリに6割(58.3%)が集中しており、自己の成績を真ん中あたりに位置づけている生徒が多数派であることがわかる。回答を相対的に「上」(「1」「2」)、「真ん中」(「3」「4」「5」)

相対的に「下」(「6」「7」)に3分してみると、それぞれ11.6%、58.3%、26.7%となる。「上のほう」よりも「下のほう」に偏った分布を示し、これからみると、学年の中で、真ん中あたりよりも下位に自分の成績を位置づける生徒のほうが相対的に多い。

時系列的にみると、第1回調査以降、成績の自己評価は、徐々に下方へとシフトする傾向をみせている。自己の成績を上位2カテゴリ(「1」「2」)と下位2カテゴリ(「6」「7」)に位置づける生徒の比率は、それぞれ、第1回15.4%・18.2% 第2回15.3%・25.1% 第3回11.6%・26.7%と変化してきた。この調査では、さまざまな領域について高校生の意識が時系列的にみて「自己を肯定視」する方向へと変化していることを報告しているが、その中において成績の自己評価だけは異質である。

図1-2-1 成績の自己評価(時系列)



## ②とりたいと思う成績・がんばればとれると思う成績

とりたい成績（アスピレーション）は、上位3カテゴリ（「1」「2」「3」）にほぼ9割が集中し、「真ん中」から下の成績でよいと答えた生徒は約1割にとどまる。成績に対するアスピレーションは、かなり高い水準にある。学業的能力の自己概念についても、現在の成績はともかく、がんばって自分の能力をすべて発揮したとすれば、8割以上の生徒が学年で中の上より上位の成績がとれると考えている。高校生の学業面での能力の自己概念はかなり高いと考えられる。

ただし、時系列的にみると、とりたいと思う成績もがんばればとれると思う成績も徐々に下方ヘシフトしている。

Q

あなたはどのくらいの成績がとれたらいいと思いますか。  
現在の成績は別として、あなたがうんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思いますか。

では、高校生はどのくらいの成績がとれたらいいと考えているだろうか。また、「うんとがんばれば」どのくらいの成績がとれると考えているのだろうか。前項でみたのは現在の成績に対する自己評価であったが、次に、(1)希望する成績の水準、アスピレーション(意欲)と、(2)学業的能力の自己評価(うんとがんばれば……)の側面をみてみよう。

まず、希望する成績の水準である。回答は大きく「上のほう」に偏っている(図1-2-2)。全体としてみると「1(上のほう)」から順に、「1」38.6%、「2」28.7%、「3」19.6%であり、この3カテゴリでほぼ9割に達する。逆に「4(真ん中)」から下の成績でよいと答えた生徒は(「4」「5」「6」「7」)合計でも約1割にとどまる。成績に対するアスピレーションは、かなり高い水準にある。

学業的能力の自己概念についてはどうだろうか。この調査では、多少妙な質問だが、「現在の成績は別として、あなたがうんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思うか」を尋ねてみた。

全体の分布をみると(前掲図1-2-2)

「1(上のほう)」から順に28.3%、「2」35.3%、「3」21.2%、「4(真ん中)」10.0%であり、相対的に「下のほう」(「5」「6」「7」)は合計でも2.7%にすぎない。現在の成績はともかく、がんばって自分の能力をすべて発揮したとすれば、8割以上の生徒が学年で中の上より上位の成績がとれると考えている。この意味で、高校生の学業面での能力の自己概念はかなり高いと考えられる。

この回答を、現在の総合的な成績(学年の中で)希望する(とれたらいい)成績と比較してみよう(図1-2-2)。学業的能力の自己概念は明らかに、成績の自己評価よりもとりたい成績に近い。このことはすなわち、たとえ現在の成績は下位でも努力次第で成績の上昇が達成できるという見通しを生徒たちは持ってあり、また希望する成績の水準もまったく根拠のないものではなく、能力の自己概念の高さという、「主観的な」裏づけを持ったものであることを意味している。

とりたい成績と学業的能力の自己概念について、時系列的に分布の変化をみたのが表1-2-1である。表によれば、①上位の成績をとりたいと思う生徒(最上位「1」とその

次「2」の合計)は、第1回75.3% 第2回71.9% 第3回67.3%と低下しており、同様に、②うんとがんばれば上位の成績をとれると思う生徒(「1」と「2」の合計)も、第1回69.3% 第2回65.3% 第3回63.6%へとやや減少している。

時系列的にみると、とりたいと思う成績もがんばればとれると思う成績も徐々に下方へシフトしている。

とりたい成績と、がんばればとれる成績は、現在の成績の自己評価と、どう結びついているだろうか。

図1-2-2 とりたいと思う成績・がんばればとれると思う成績

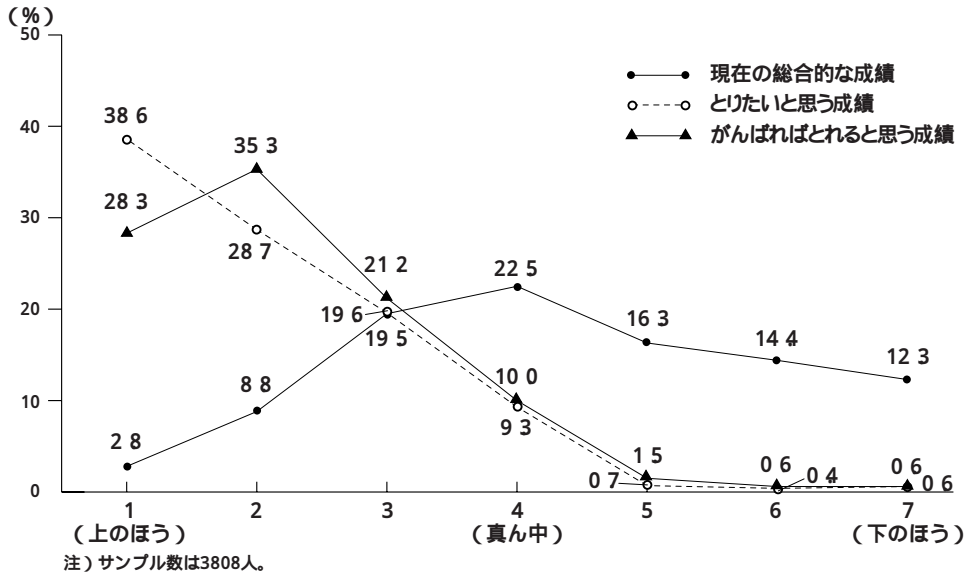


表1-2-1 とりたいと思う成績・がんばればとれると思う成績(時系列)

		(%)		
		第1回(2005)	第2回(2615)	第3回(3808)
とりたいと思う成績	1 (上のほう)	43.7	43.1	38.6
	2	31.6	28.8	28.7
	3	15.3	16.3	19.6
	4 (真ん中)	6.6	9.9	9.3
	5	0.8	0.7	0.7
	6	0.3	0.3	0.4
	7 (下のほう)	0.5	0.4	0.6
がんばればとれると思う成績	1 (上のほう)	29.8	30.8	28.3
	2	39.5	34.5	35.3
	3	19.8	20.6	21.2
	4 (真ん中)	7.5	10.3	10.0
	5	1.4	2.1	1.5
	6	0.6	0.6	0.6
	7 (下のほう)	0.4	0.4	0.6

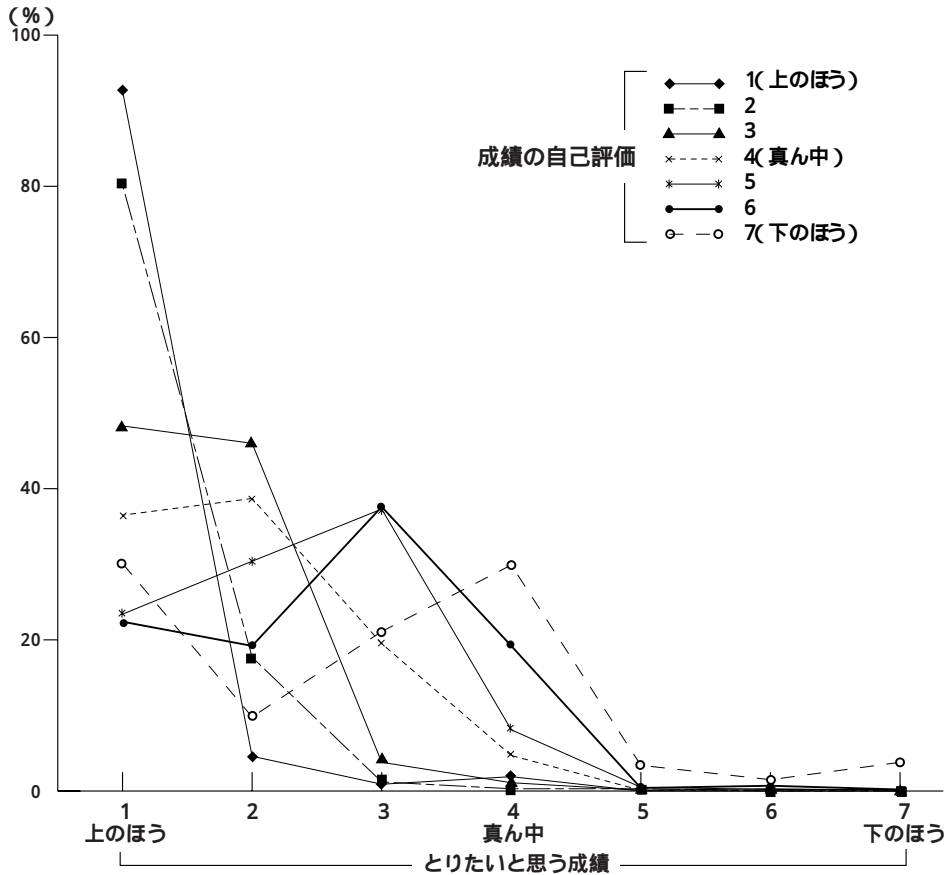
注)( )内はサンプル数。

とりたいと思う成績についてみると（図1 - 2 - 3）成績の自己評価が上位（「1」と「2」）の生徒は、8割以上が最上位の成績をとりたいと考えている。一方、成績の自己評価が中の上以下（「3」以下）の生徒で最上

位の成績をとりたいと考えているのは、半数以下でしかない。がんばればとれると思う成績についても（図1 - 2 - 4）ほとんど同じ関係がみられる。

以上から、とりたいと思う成績の水準（ア

図1 - 2 - 3 とりたいと思う成績（成績の自己評価別）



(%)

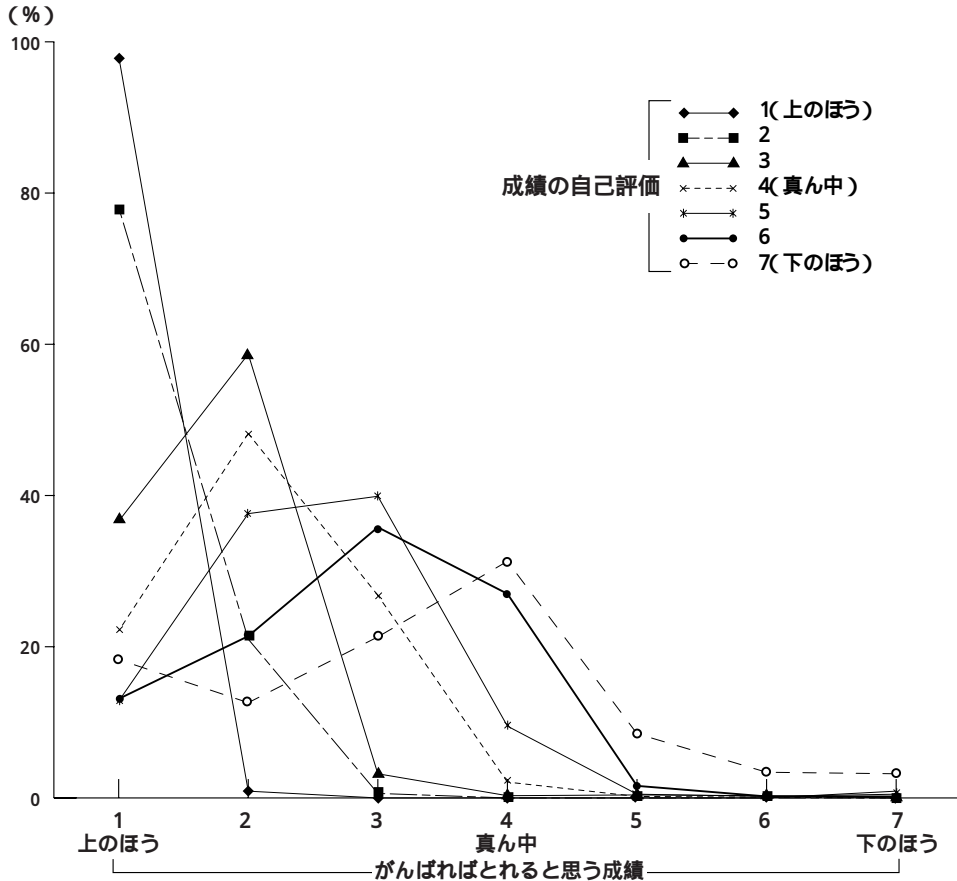
		とりたいと思う成績						
		1(上のほう)	2	3	4(真ん中)	5	6	7(下のほう)
成績の自己評価	1(上のほう)	92.6	4.6	0.9	1.9	0.0	0.0	0.0
	2	80.2	17.7	1.2	0.3	0.3	0.0	0.0
	3	48.3	46.0	3.8	1.1	0.1	0.3	0.1
	4(真ん中)	36.5	38.7	19.5	4.7	0.1	0.1	0.1
	5	23.4	30.4	37.3	8.1	0.5	0.2	0.2
	6	22.4	19.2	37.6	19.2	0.4	0.7	0.2
	7(下のほう)	30.1	9.8	21.1	29.9	3.4	1.5	3.8

注) サンプル数は3808人。

スピレーション)とがんばればとれると思う成績の水準(学業的能力の自己概念)は、いずれも現在の成績の自己評価と強い相関を示す。そして、アスピレーションと学業的能力

の自己概念の高さは、特に上位2カテゴリに自己の成績を位置づけているか否かによって、大きく異なっている。

図1-2-4 がんばればとれると思う成績(成績の自己評価別)



		がんばればとれると思う成績 (%)						
		1(上のほう)	2	3	4(真ん中)	5	6	7(下のほう)
成績の自己評価	1(上のほう)	98.1	0.9	0.0	0.0	0.0	0.0	0.9
	2	78.1	21.0	0.6	0.0	0.0	0.0	0.0
	3	36.6	58.7	3.2	0.3	0.4	0.3	0.0
	4(真ん中)	22.1	48.2	26.8	2.1	0.2	0.1	0.0
	5	12.8	37.6	38.9	9.5	0.5	0.2	0.5
	6	13.1	21.4	35.8	27.0	1.6	0.2	0.2
	7(下のほう)	18.3	12.6	21.3	31.3	8.5	3.4	3.2

注) サンプル数は3808人。

### ③成績観・学力観

「ふつうの生活(ほどほどの学力)志向」と「名門大学志向」が突出して高い比率を示す。「勉強本位志向(今は勉強することが一番大切)」は、5人に1人の割合である。第2回調査と比較して「ふつうの生活(ほどほどの学力)志向」が56.2%から45.3%へと大きく減少し、また第1回調査以降「勉強本位志向」が一貫して減少している(25.4% 23.9% 19.5%)。「名門大学志向」は上位ランクの高校ほど強く、逆に、「ふつうの生活(ほどほどの学力)志向」「ともかく合格志向」「学校生活エンジョイ志向」は、いずれも学校ランクが下位の高校ほど強い。



あなたは、次のように思うことがありますか。

高校生の大半は少なくとも中位以上の成績をとりたいと考えている。そこで、この成績アスピレーションのあり方について、現在の学校生活の過ごし方や将来計画にかかわらせてもう少し詳しくみることにしよう。

6つの選択肢について回答を多い順に並べると次のようになる(図1-2-5)。

- ①(名門大学志向)できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げたい(54.9%)
- ②(ふつうの生活志向)将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい(45.3%)
- ③(ともかく合格志向)どこかの大学・短期大学に入れる学力があればいい(27.9%)
- ④(学校生活エンジョイ志向)学校生活が楽しければ、成績にはこだわらない(23.6%)
- ⑤(勉強本位志向)今は勉強することが一番大切なことだ(19.5%)
- ⑥(楽観的予測)そんなに勉強しなくても、なんとか進学できるだろう(10.7%)

とりたい成績を尋ねた場合、大半の生徒が「上位」と答えているにもかかわらず、現在の生活の中で勉強が一番大切だとする「勉強本位志向」は5人に1人であり、決して多数派とはいえない。高校生の多くにとって、勉強は必ずしも生活上の最重要事項ではない。

とはいえ、成績や学力にはこだわっていないというわけではない。学校生活が楽しければ、成績にはこだわらないという「学校生活エンジョイ志向」は、やはり4人に1人と少数派である。さらに、そんなに勉強しなくても、なんとか進学できるだろうと、楽観的に予測している者も1割程度である。

それでは、どの程度の成績や学力が必要なのか。回答率が高かった項目は、「できるだけいい大学に入れるよう、成績を上げたい」と「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい」の2つである。「ふつうの生活(ほどほどの学力)志向」と「名門大学志向」が突出して高い比率を示す。この2つに「ともかく合格(どこかの大学・短期大学に入れる学力)志向」が続く。成績アスピレーションには、「ふつうの生活(ほどほどの学力)志向」「ともかく合格(どこかの大学・短期大学に入れる学力)志向」が相当程度含まれており、高校生の成績アスピレーションが単純に高い水準にあるとはいえないことがわかる。

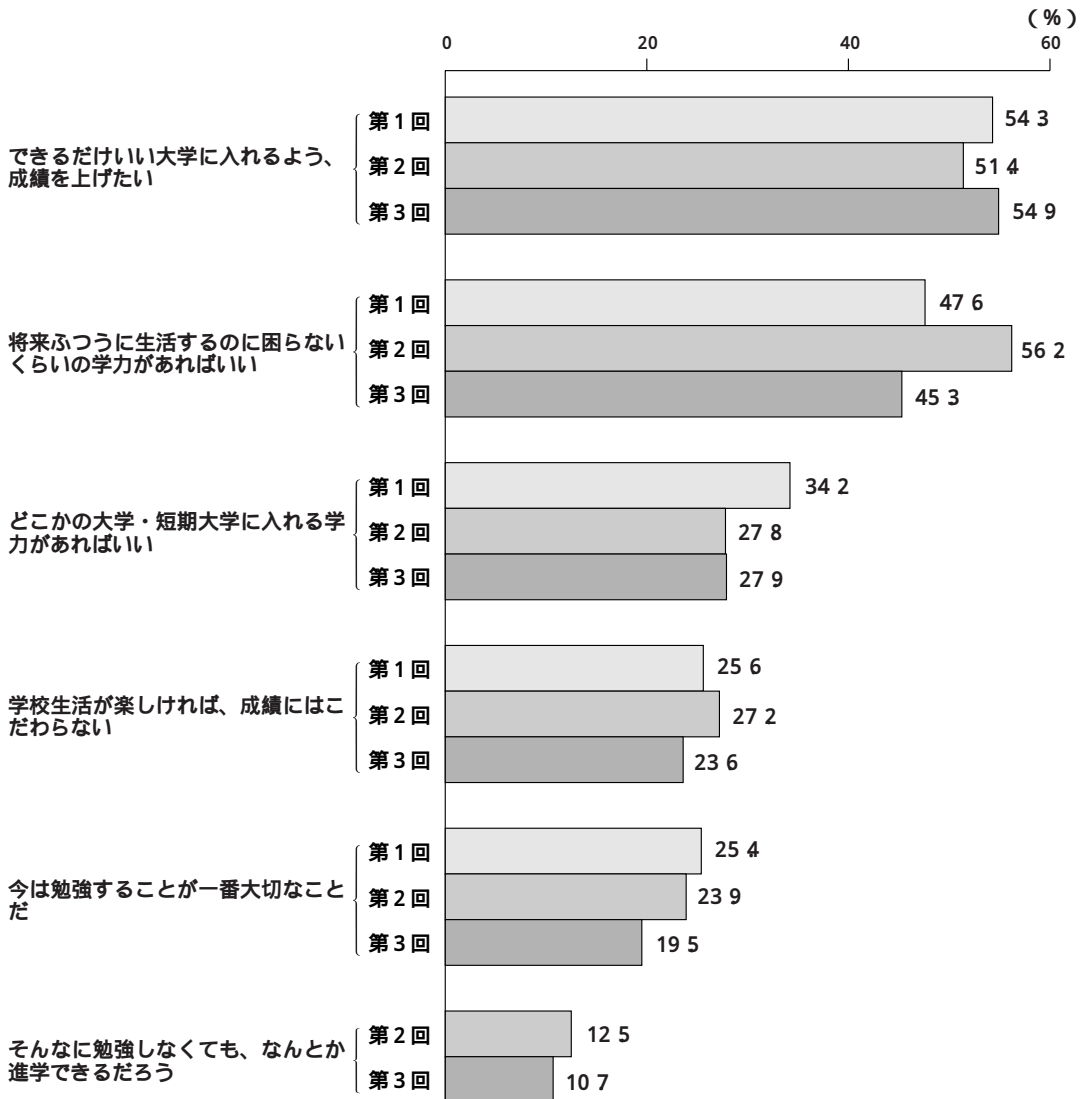
時系列的にみると、第2回調査と比較して「ふつうの生活(ほどほどの学力)志向」が56.2%から45.3%へと大きく減少し、また第1回調査以降「勉強本位志向」が一貫して減

少している（25.4% 23.9% 19.5%）点が目を引く。第2回調査時点では、「名門大学志向」が減少してトップの座を「ふつうの生活（ほどほどの学力）志向」に明け渡したが、第3回調査では「名門大学志向」が第1回調

査と同レベルにまで回復して、再びトップに立った。

これらの結果を学校ランク別にみると、学校ランクによる差が顕著である（図1-2-6）。「名門大学志向」（できるだけいい大学

図1-2-5 成績観・学力観（時系列）



注1) 複数回答。

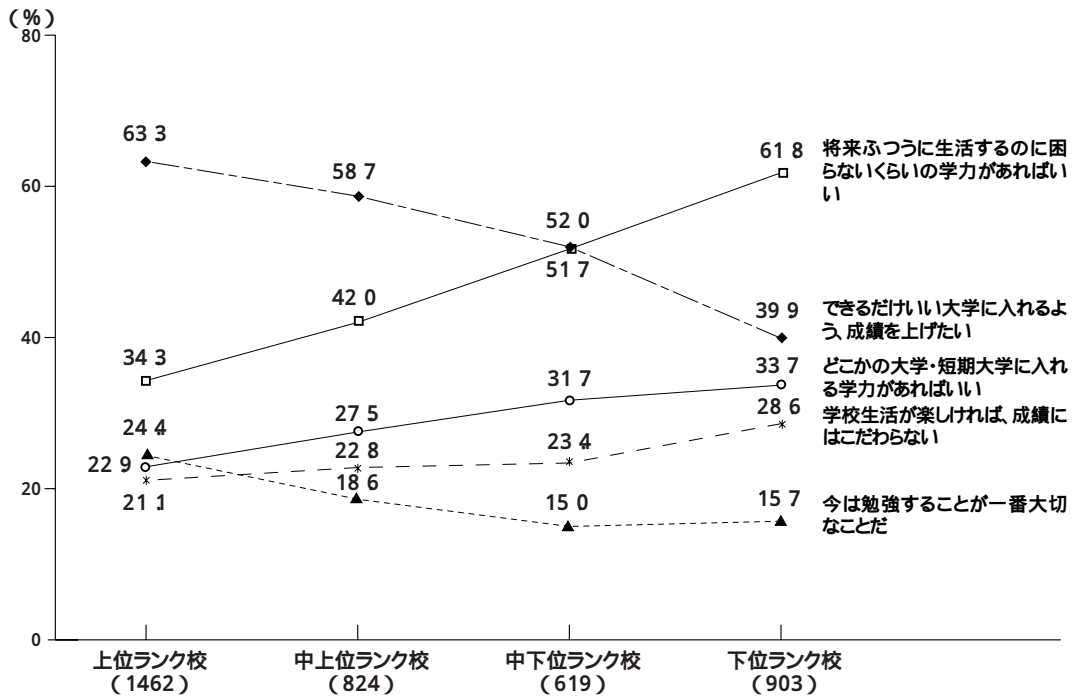
注2) は第1回に該当項目なし。

注3) サンプル数は第1回2005人、第2回2615人、第3回3808人。

に入れるよう成績を上げたい)は上位ランク校ほど強く、上位ランク校では63.3%に達する。逆に、「ふつうの生活(ほどほどの学力)志向」「ともかく合格志向」「学校生活エンジョイ志向」は、いずれもランクの低い高校ほ

ど強い。学力や成績に対する構えは、それを量的な水準という角度からだけみているとあまり明確ではないが、このように学校ランクによって鋭い分化をみせている。

図1-2-6 成績観・学力観(学校ランク別)



注1) 複数回答。

注2) ( )内はサンプル数。

#### ④ よい成績をとるのに大切だと思うこと

よい成績をとるのに大切だと考えられているベスト・スリーは、「努力」88.0%（「とても大切」の割合）、「上手な勉強法」78.8%、「授業をしっかりと聞く」78.7%である。ここには高校生の成績や学力の向上における、精神（努力）主義（努力と強い意志）、自己主義（運や人の助けではなく自分の努力や態度が大切）、学校（日常的構え）重視、技術主義（上手な勉強法）が現れている。時系列的にみると、多くの項目で「とても大切」とする回答が増加していることが目立つ。あれもこれもが成績を向上させる上でより大切だと認識されるようになっている。



よい成績をとるためには、次のことはどれくらい大切だと思いますか。

高校生は、よい成績をとるためには、どんなことが大切だと考えているのだろうか。「努力」や「運」など10項目を設定して、それぞれについて「とても大切」から「ぜんぜん大切でない」まで4段階で答えさせた。「とても大切」の数値に注目して回答を多い順に整理すると次のようになる（図1-2-7）。

①「努力」88.0%、②「上手な勉強法」78.8%、③「授業をしっかりと聞く」78.7%、④「教える方の上手な先生」56.7%、⑤「人に負けたくないという気持ち」56.6%、⑥「自分に合った問題集・参考書」44.0%、⑦「運」25.7%、⑧「生まれつきの能力」23.4%、⑨「家族の協力」13.7%、⑩「よい学習塾や予備校に行く」7.4%となる。

ベスト・スリーは「努力」「上手な勉強法」「授業をしっかりと聞く」であり、この3者はいずれも8割程度以上の回答を集めている。

この結果は次のように解釈できるだろう。第一に、「努力」がもっとも多く、「生まれつきの能力」が第8位にすぎないことから、成績は生得的な能力の反映であるよりも、後天的な努力の積み重ねによって向上できるものであるという認識である。10項目の中からもっとも大切だと思うこと1つを選択させた結果でも（図1-2-8）「努力」は58.8%と

他を圧倒的に引き離して第1位の数値を示す。実際に学習にどの程度努力しているのかは別として（p 29～33参照）、学力、成績が努力の反映であるという意識は、いまだ根強い。この成績向上の手段としての努力信仰は、「人に負けたくない気持ち」（56.6%）と結びついて、努力＝強い意志＝成績向上という一種の精神主義を形成しているように思う。

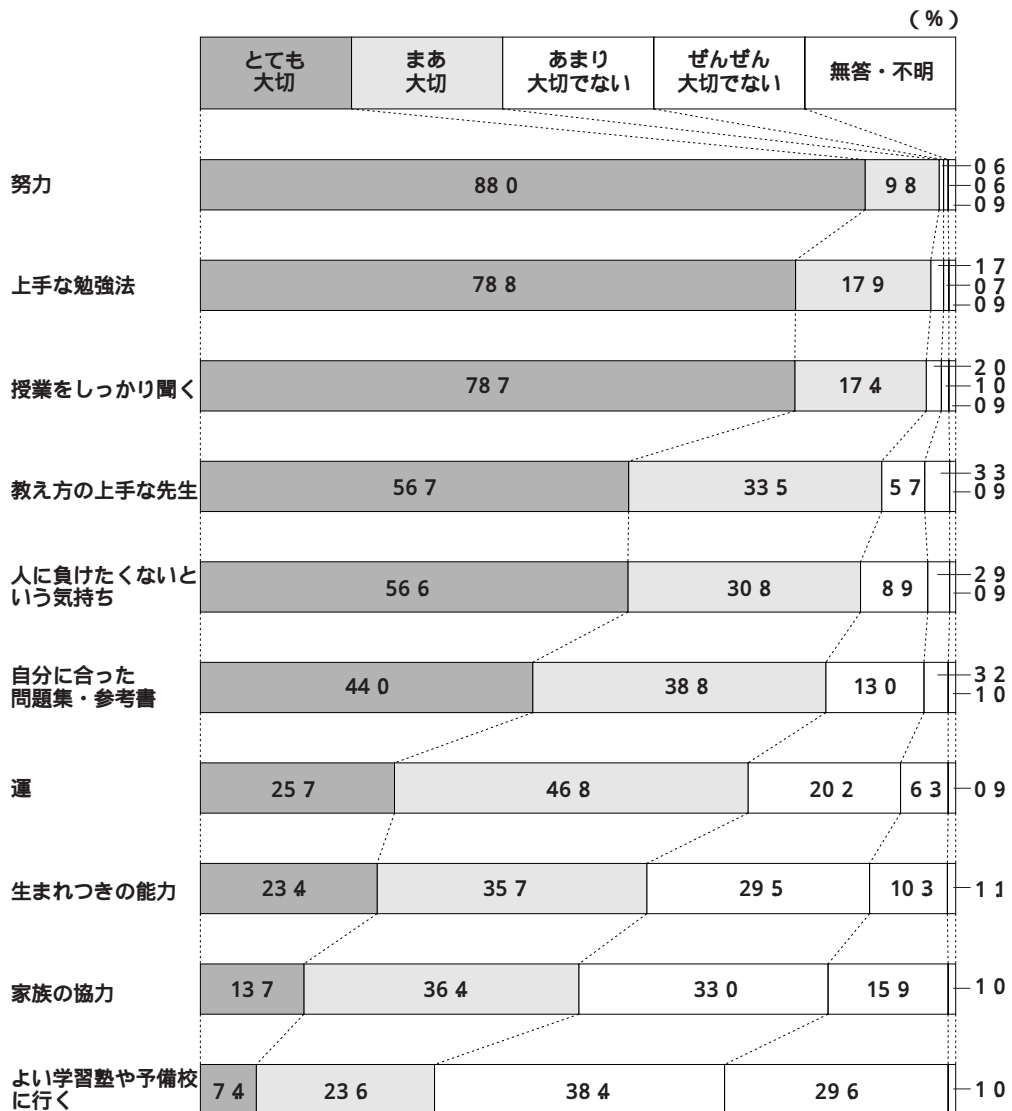
第二に、成績の向上は、運や人の助けではなくあくまでも自分の努力ややる気、構えの結果であると考えられていることである。学力形成における「自己主義」である。成績向上にとって、運や家族の協力が大切だという回答はごく少ない。仮に成績が不振だった場合には、その原因を運、他者や環境に帰属させるのではなく、自分の努力や意志に原因を求めざるをえないことになる。

第三に、学習塾や予備校といった学校外学習機会よりも、授業をしっかりと聞くことのほうが大切だと考えられている。これは、学校での授業、しかも日常的な授業における構えの重要性を認識している結果と解釈できる。学力形成における学校重視、日常的構えの重視である。第四に、とはいえ、成績の向上が、単にがむしゃらな日常的努力や人に負けたくないなどの精神力のみによって可能だと考え

られているわけではない。「上手な勉強法」が大切だという回答は約8割に及び、また「教え方の上手な先生」「自分に合った問題集・参考書」をあげる者もそれぞれ56.7%、

44.0%ある。ここでは、成績の向上には努力、精神が必要なだけでなく、効率的な学習法が必要であるという「技術主義」もまた存在している。

図1-2-7 よい成績をとるために大切なこと



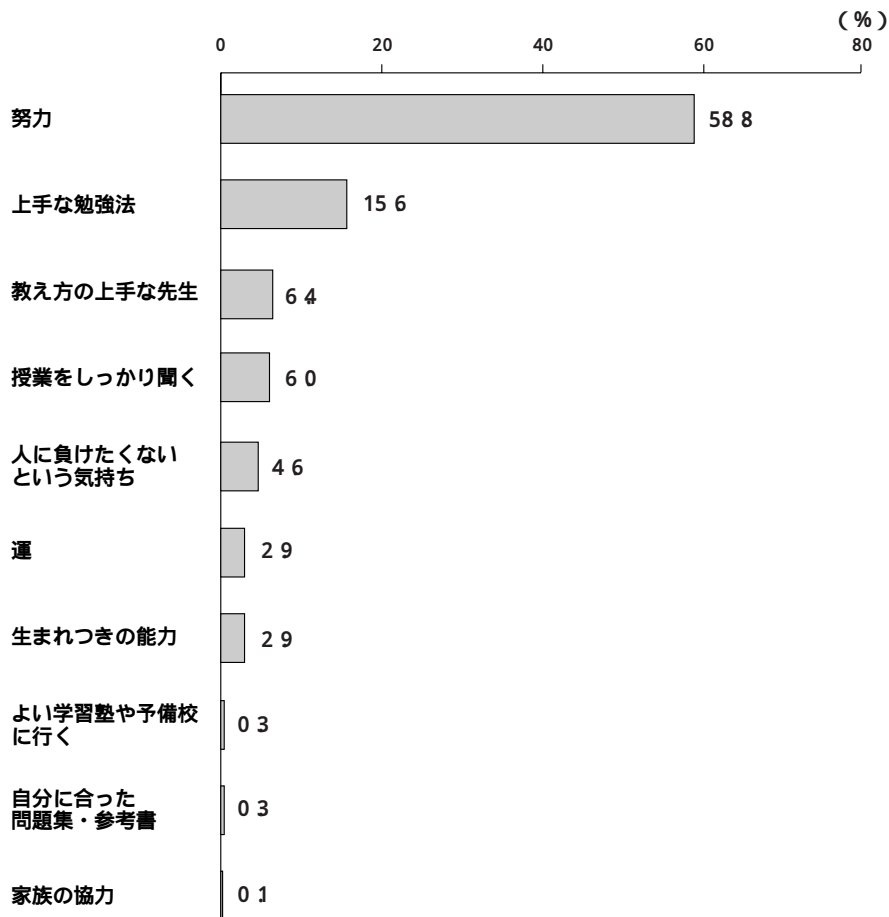
注) サンプル数は3808人。

これらを時系列的にみると、多くの項目で「とても大切」とする回答が増加していることが目立つ(図1-2-9)。どれかが減少して代わりの項目が増加するという変化の仕方ではなく、「努力」も「上手な勉強法」も「教え方の上手な先生」も「授業をしっかり聞くこと」も大切……あれもこれもが成績を向上させる上でより大切だと認識されるよう

になっている。

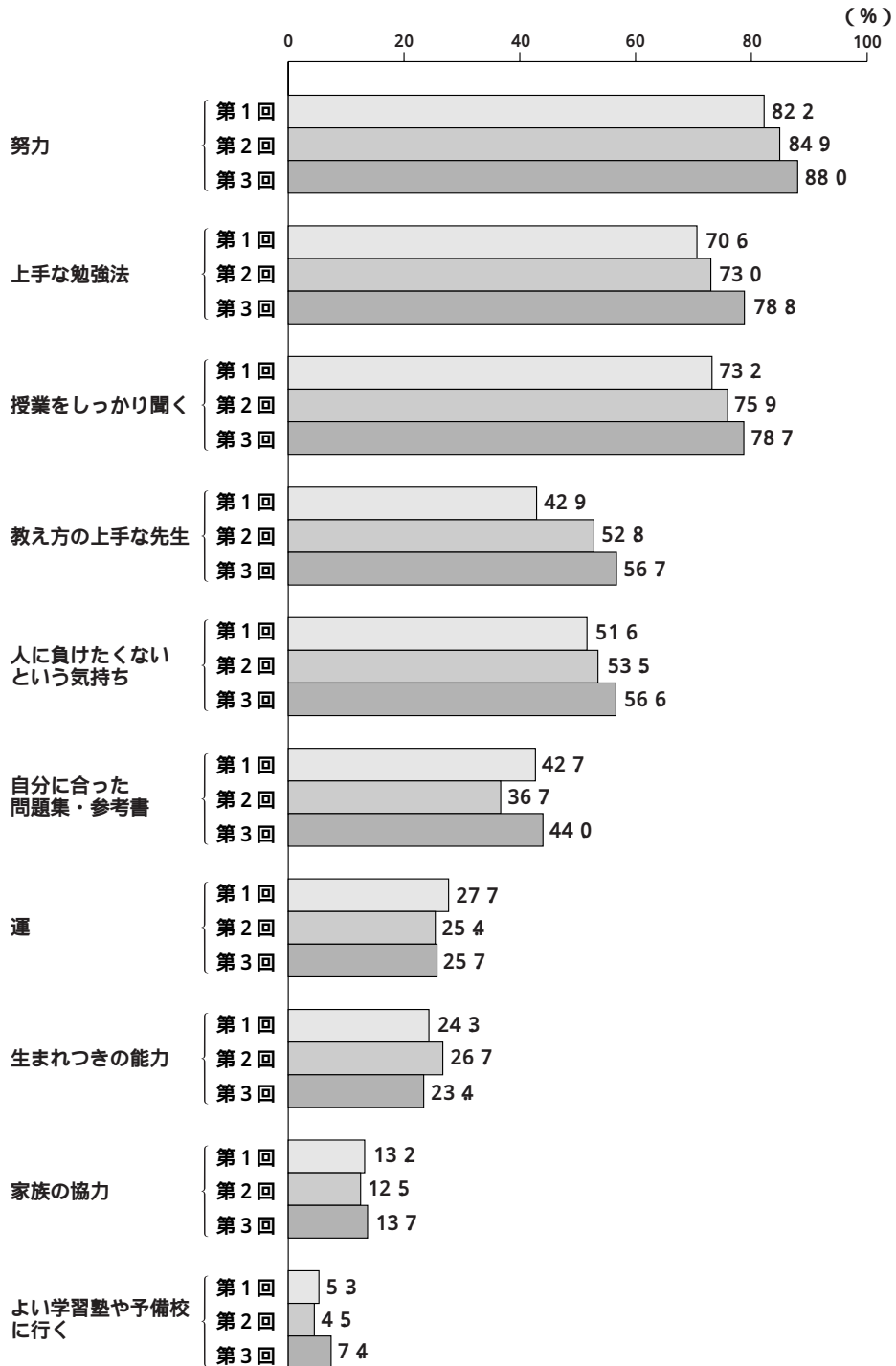
学校ランク別にみると(図1-2-10)、  
①「人に負けたくない気持ち」と「教え方の上手な先生」が下位ランクの高校生で少なく、  
②「努力」が上位ランク校、中上位ランク校で多く、③「自分に合った問題集・参考書」が上位ランク校で多いという結果が出ている。

図1-2-8 よい成績をとるのにもっとも大切なこと



注1) 10項目中1つを選択。  
注2) サンプル数は3808人。

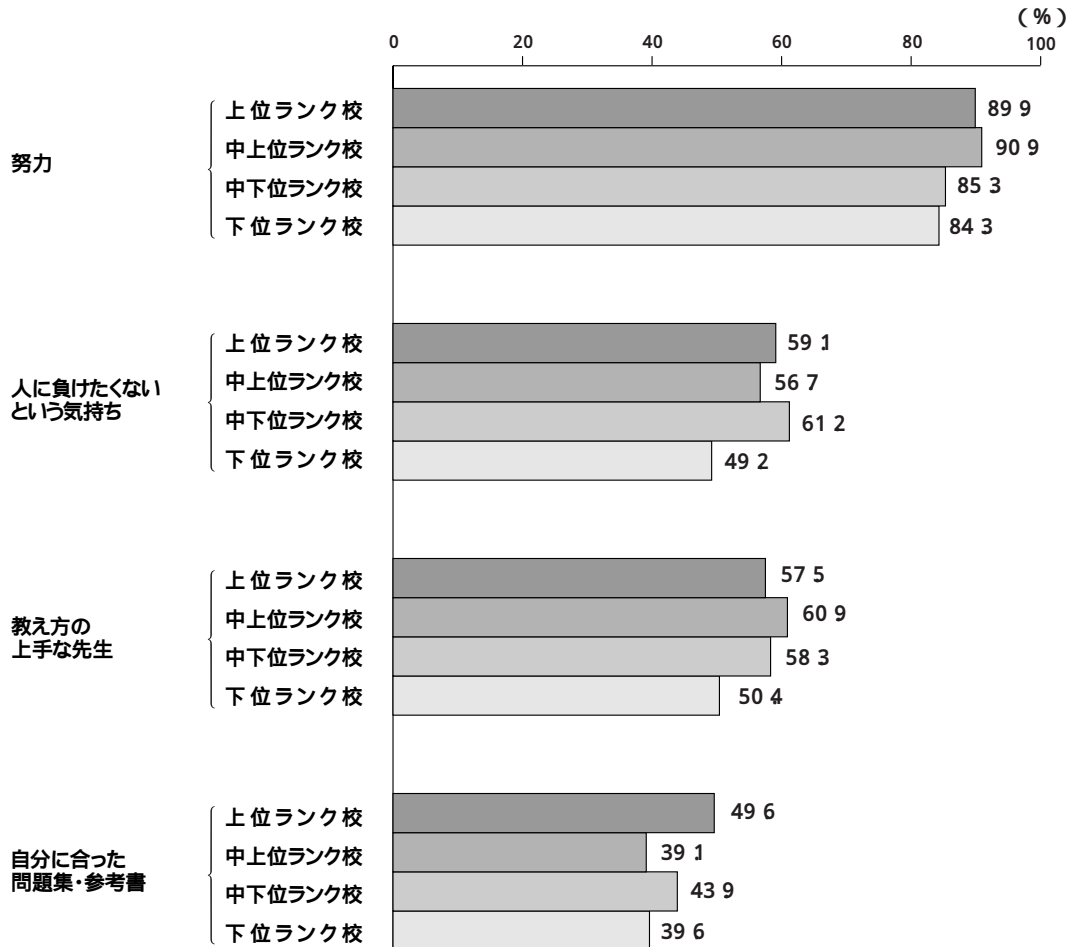
図1-2-9 よい成績をとるために大切なこと（時系列）



注1) 数値は「とても大切」の割合。

注2) サンプル数は第1回2005人、第2回2615人、第3回3808人。

図1 - 2 - 10 よい成績をとるために大切なこと（学校ランク別）



注1) 数値は「とても大切」の割合。

注2) サンプル数は、上位ランク校1462人、中上位ランク校824人、中下位ランク校619人、下位ランク校903人。

## 2. 学習していて感じること

「生き物や自然を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」76.8%（「よくある」「時々ある」の合計）、「国語の教科書を読んでいて、登場人物や書いてある内容に興味がわいてくる」62.4%、「社会のしくみや歴史のできごとを『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」61.8%など、「すばらしい」とか「ふしぎだ」と感じる経験は多い。しかし、自然や社会について、「調べたり考えたりする」ことが「好き」と答えた回答は少ない。「すばらしい」とか「ふしぎだ」と思った知的体験を、自ら調べたり考える学習行動へと、いかにして結びつけるかが課題となっている。



あなたは勉強していて、次のように感じることはありますか。

学習のプロセスでは、「悩み」（p.74参照）だけでなく、さまざまな感情や知的欲求、関心の高まりなどが伴う。ここでは、やや雑多だが、そうした多様な感情、知的欲求、関心の高まりを、高校生がどの程度経験しているのかをまとめて尋ねてみた。具体的には、勉強していて、「すばらしい」とか「ふしぎだ」と思った経験、興味さらに強まってきた経験、自分で調べたり考えたりすることへの関心などである。

図1-2-11は単純集計結果を示した。「よくある」「時々ある」の合計比率が大きい順に項目を並べると次のようになる。①「自分や相手の気持ち・考えをうまく出し合えたらいいと思う」78.6%、②「生き物や自然を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」76.8%、③「国語の教科書を読んでいて、登場人物や書いてある内容に興味がわいてくる」62.4%、④「社会のしくみや歴史のできごとを『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」61.8%、⑤「英語を使って外国の人と話したり、手紙を書いたりしてみたい」60.6%、⑥「数学の考え方や解き方を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」53.8%、

⑦「生き物や自然のことを調べたり考えたりするのが好きだ」48.6%、⑧「社会のしくみや歴史のできごとを調べたり考えたりするのが好きだ」47.4%、⑨「数学の問題の解き方を考えたり工夫したりするのが好きだ」41.6%。

これらの数値を大きいとみるか小さいとみるかは評価の分かれるところだろうが、「すばらしい」とか「ふしぎだな」と感じることは、対象への知的関心の出発点・原動力であり、かつ学習のもっとも重要な成果の1つであることは間違いない。新しい学力観に基づく教育実践が子どもたちの知的体験にどのように影響するか、今後の推移に引き続き注目しておきたい。

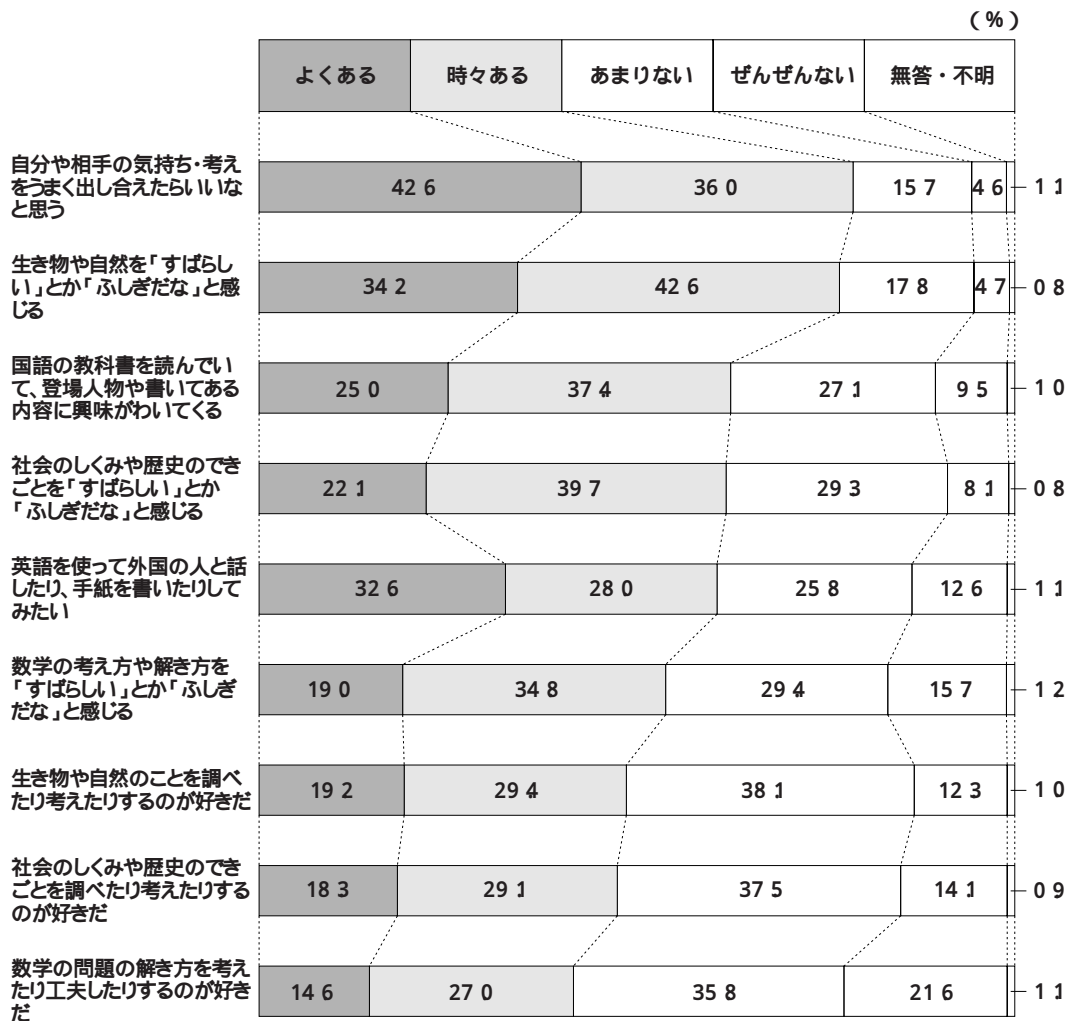
自然や社会について、調べたり考えたりする（数学については解き方を考えたり工夫すること）が「好き」と答えた回答は、9項目中で下のほうに集中し、しかも「よくある」と「時々ある」を合わせても5割程度以下にとどまっている。これらは新しい学力観のもっとも重要なねらいに含まれると考えられるが、現時点では決して高い数値となっていない。「すばらしい」とか「ふしぎだな」と

思った知的体験を、自ら調べたり考える学習行動へと、いかにして結びつけるかが課題となっている。

第3回調査の回答を第2回調査と比べると、

「生き物や自然を『すばらしい』とか『ふしぎだな』と感じる」など4項目で肯定的な回答が増加した(表1-2-2)。

図1-2-11 学習していて感じること



注) サンプル数は3808人。

表1 - 2 - 2 学習していて感じること(時系列)

(%)

		第2回(2615)	第3回(3808)
生き物や自然を「すばらしい」とか「ふしぎだな」と感じる	よくある	27.0	34.2
	時々ある	41.0	42.6
	よくある+時々ある	68.0	< 76.8
	あまりない	23.5	17.8
社会のしくみや歴史のできごとを「すばらしい」とか「ふしぎだな」と感じる	ぜんぜんない	8.1	4.7
	よくある	20.1	22.1
	時々ある	35.0	39.7
	よくある+時々ある	55.1	< 61.8
数学の考え方や解き方を「すばらしい」とか「ふしぎだな」と感じる	あまりない	32.3	29.3
	ぜんぜんない	12.4	8.1
	よくある	14.6	19.0
	時々ある	32.2	34.8
数学の問題の解き方を考えたり工夫したりするのが好きだ	よくある+時々ある	46.8	< 53.8
	あまりない	33.3	29.4
	ぜんぜんない	19.4	15.7
	よくある	10.4	14.6
	時々ある	23.9	27.0
	よくある+時々ある	34.3	< 41.6
	あまりない	36.4	35.8
	ぜんぜんない	28.8	21.6

注1) 第1回は該当項目なし。

注2) 第2回と第3回で差のある項目のみ抽出。

注3) &lt; &gt; は第2回と第3回で5%以上差があるもの。

注4) ( ) 内はサンプル数。

### 3. 学習上の悩み

悩みのトップ・スリーは、①「上手な勉強の仕方がわからない」64.2%、②「どうしても好きになれない科目がある」61.0%、③「こつこつと努力できないで困る」60.5%である。第1回調査以降、「わかりやすい授業にしてほしい」(第1回34.3% 第2回45.2% 第3回50.5%)と「どうしても好きになれない科目がある」(56.5% 58.8% 61.0%)が増加し、「勉強する科目を自分でもっと選択できるといい」(39.1% 40.3% 31.4%)、「先生は成績にこだわりすぎる」(27.5% 26.6% 14.1%)、「親の期待が大きすぎる」(20.2% 16.1% 12.3%)が減少をみた。後二者は、いずれも成績の向上や学習に対する、親や教師からのプレッシャーの低下を反映したものと考えられる。



あなたは勉強について、次のように思うことがありますか。

高校生は、学習上どのような悩みを抱えているのだろうか。高校生の半数程度以上が「そう思うことがある」と答えたのは、以下の7項目である。

①「上手な勉強の仕方がわからない」64.2%、②「どうしても好きになれない科目がある」61.0%、③「こつこつと努力できないで困る」60.5%、④「覚えなければいけないことが多すぎる」55.8%、⑤「どうしてもこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」55.5%、⑥「わかりやすい授業にしてほしい」50.5%、⑦「世の中に出てから、もっと役に立ちそうな勉強がしたい」49.6%。

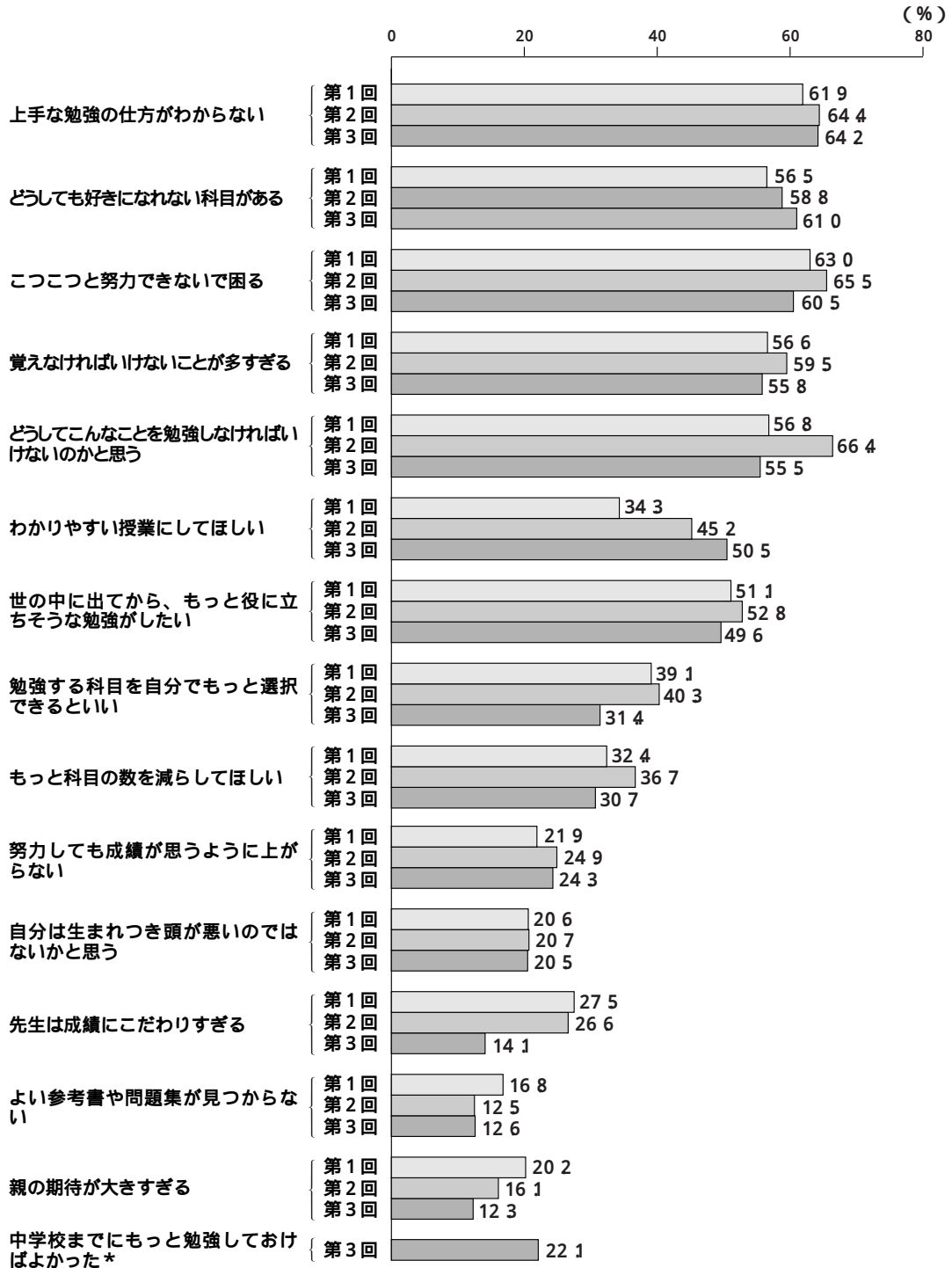
学習をめぐる悩みや不満は、こつこつ努力できない自分に対して向けられており、さらに上手な勉強の仕方を手に入れたいという欲求が強い。わかりやすい授業を望む声も大き

い。この結果は、成績を向上させるのに大切な要因(努力主義、効率的な勉強方法—技術主義、p66~70参照)と符合している。成績を向上させるために必要だと考えている要素、手段が自分に欠けていることが大きな悩みなのである。

「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」と「世の中に出てから、もっと役に立ちそうな勉強がしたい」という回答には、学習内容や、勉強という行為そのものに対する疑義、不満が端的に現れているといってよいだろう。必ずしも社会生活に直接役立つ学習が重要だとはいえないにせよ、課せられた学習内容の意義を自分なりに咀嚼できない高校生の苛立ちが現れている。

「中学校までにもっと勉強しておけばよかった」は22.1%である(図1-2-12)。

図1-2-12 学習上の悩み(時系列)



注1) 複数回答。

注2) \*は第1回、第2回に該当項目なし。

注3) サンプル数は第1回2005人、第2回2615人、第3回3808人。

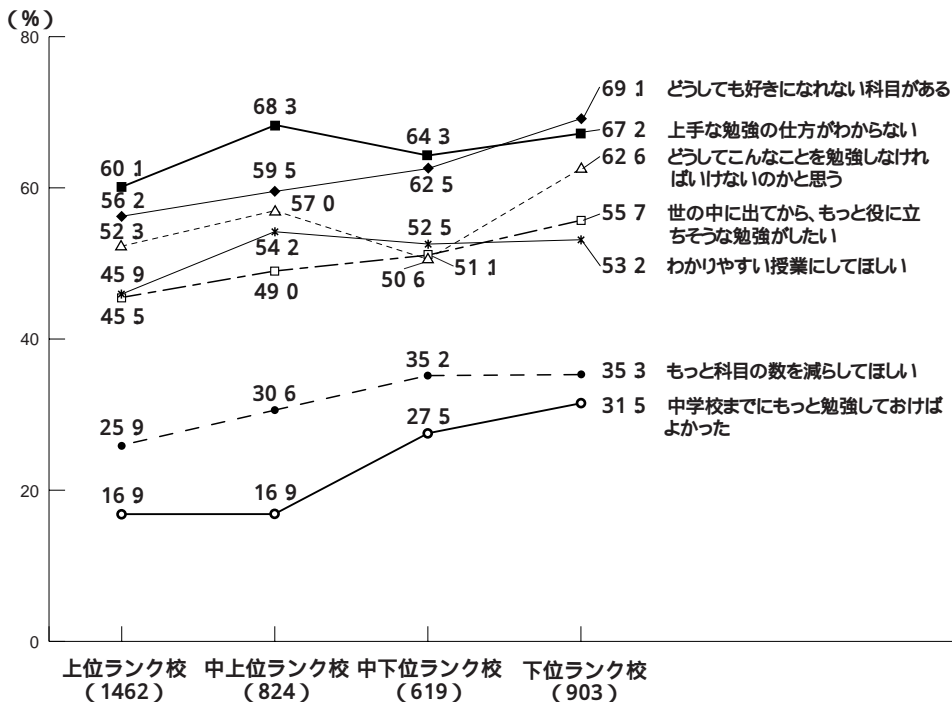
時系列的にみて、増加傾向を示しているのは、①「わかりやすい授業にしてほしい」(第1回34.3% 第2回45.2% 第3回50.5%)と②「どうしても好きになれない科目がある」(56.5% 58.8% 61.0%)の2項目である。学習上の悩みの源泉が、自分ではなく授業や教師、知識体系としての科目に向けられる傾向が強まった。

逆に、減少を示したのは、以下である。①「勉強する科目を自分でもっと選択できるといい」(39.1% 40.3% 31.4%)、②「先生は成績にこだわりすぎる」(27.5% 26.6% 14.1%)、③「親の期待が大きすぎる」(20.2% 16.1% 12.3%)。

後二者は、いずれも成績の向上や学習への親や教師からのプレッシャーの低下を反映したものと考えられる。

学校ランク別にみると(図1-2-13)、図にあげた項目で、下位ランク校の高校生ほど悩みを訴えることが多くなっている。「どうしてもこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」「どうしても好きになれない科目がある」「もっと科目の数を減らしてほしい」「世の中に出てから、もっと役に立ちそうな勉強がしたい」という不満を抱える一方で、「中学校までにもっと勉強しておけばよかった」と後悔している。下位ランク校の生徒ほど、そうした悩みは深い。

図1-2-13 学習上の悩み(学校ランク別)



注1) 複数回答。

注2) ( )内はサンプル数。

## 4 . 進路・進学意識

### ①希望する進学段階

78.4%が「四年制大学まで」「大学院まで」を希望し、「専門学校・各種学校まで」10.5%、「短期大学まで」2.8%、「高校まで」3.9%となっている。時系列的にみると、①四年制大学・大学院の微減、②短期大学の減少、③専門学校・各種学校の増加がみられる。

Q

あなたは将来、どの学校まで進みたいですか。

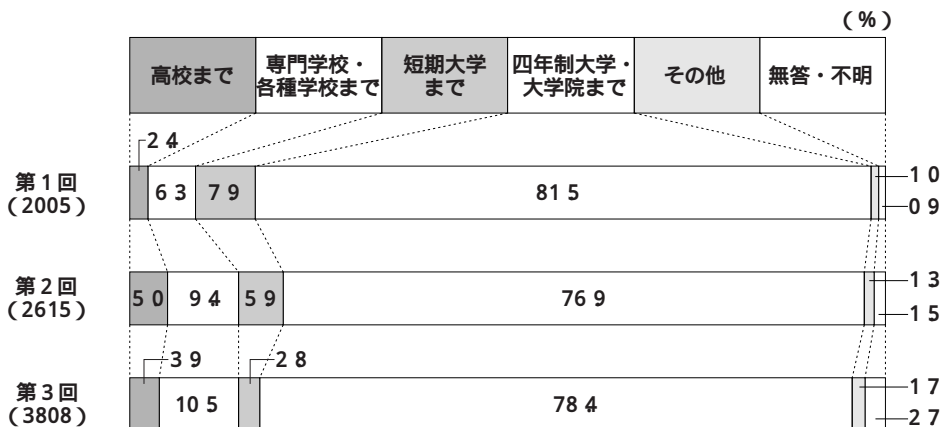
最後に、高校生の進学意識について、①希望する学校段階、②希望する大学のタイプ、③希望する入試の方法をみておく。

まず、高校生は、どの学校段階まで進学する希望を持っているだろうか(図1-2-14)。第3回調査の対象とした高校生は、8割弱(78.4%)が「四年制大学まで」「大学院まで」の進学を希望している。内訳は、「四年制大学まで」69.9%、「大学院まで」8.5%である。これに「専門学校・各種学校まで」10.5%、「短期大学まで」2.8%、「高校まで」3.9%と続く。

時系列的に比較してみると、①四年制大学・大学院の微減(第1回81.5% 第2回76.9% 第3回78.4%)、②短期大学の減少(7.9% 5.9% 2.8%)、③これに代わって専門学校・各種学校の増加(6.3% 9.4% 10.5%)がみられる。

1990年代の高校教育を全体としてみると、高等教育定員の維持と18歳人口の減少によって、上級学校への進学率は増加に転じ、「進学シフト」を経験したといつてよい。第3回調査でその傾向がみられないのは、調査対象が普通科に限定され、しかもややランクの高

図1-2-14 希望する進学段階(時系列)



注1) 第2回「四年制大学まで」69.7%、「大学院まで」7.2%、第3回「四年制大学まで」69.9%、「大学院まで」8.5%。

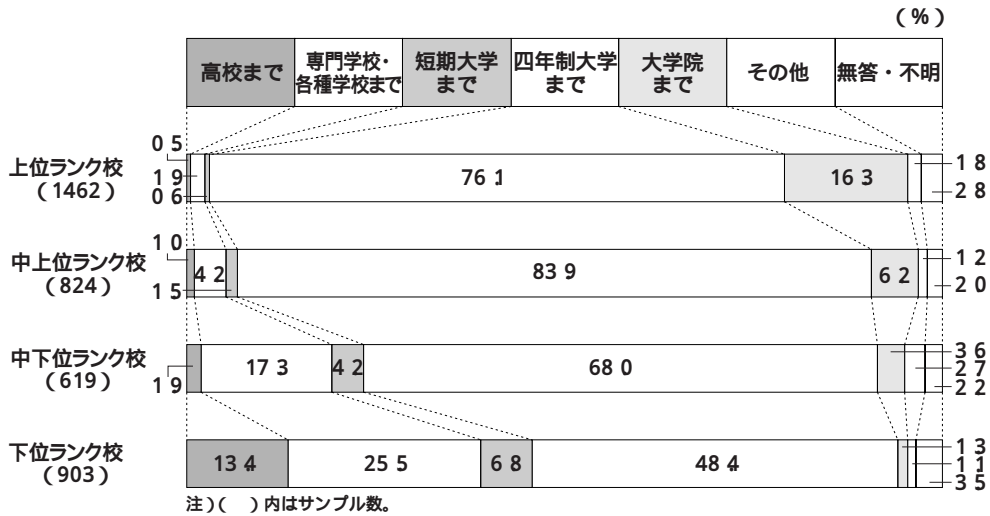
注2) ( )内はサンプル数。

い高校に偏っているためである。

学校ランク別にみると(図1-2-15)、  
ランクの高い高校ほど、①四年制大学・大学院への進学希望率が高く(ことに大学院)、  
②短期大学および専門・各種学校進学希望率が低く、③高校までとする者が少ない傾向が

ある。下位ランクの普通科高校は、約半数が四年制大学進学希望、3割強が短期大学、専門学校・各種学校進学希望、1割強が高校まで希望であり、進路多様校の様相を呈している。

図1-2-15 希望する進学段階(学校ランク別)



## ②希望する大学のタイプ

希望する大学は、①「難関ではない国公立大学」49.9%、②「難関の国公立大学」26.6%、③「難関ではない私立大学」10.8%、④「難関の私立大学」5.3%の順に並ぶ。全体に、国公立大学進学希望が優勢だが、ことに上位ランク校と中上位ランク校でその傾向が強い。



「四年制大学まで」あるいは「大学院まで」と答えた方にうかがいます。あなたは、どんな大学へ進みたいと思っていますか。

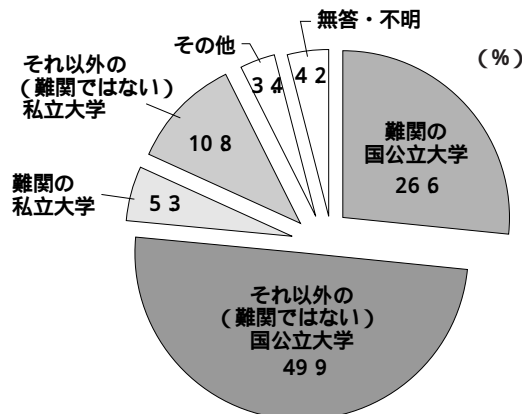
四年制大学あるいは大学院まで進学を希望する生徒に、どんな大学へ進みたいと思っているのかを尋ねた。選択肢は、①「難関の国公立大学」、②「それ以外の国公立大学」、③「難関の私立大学」、④「それ以外の私立大学」、⑤「その他」である。その結果が、図1-2-16である。

もっとも多かったのが、「それ以外の（難関ではない）国公立大学」49.9%であり、これに「難関の国公立大学」26.6%、「それ以

外の（難関ではない）私立大学」10.8%、「難関の私立大学」5.3%が次ぐ。

学校ランク別にみると（図1-2-17）、上位ランクの高校で「難関の国公立大学」への進学を希望する者が多く、「難関の私立大学」を希望するのは、中上位ランク校および中下位ランク校に多い。全体に、国公立大学進学希望が優勢だが、ことに上位ランク校と中上位ランク校でその傾向が強い（上位ランク校87.9%、中上位ランク校74.8%）。

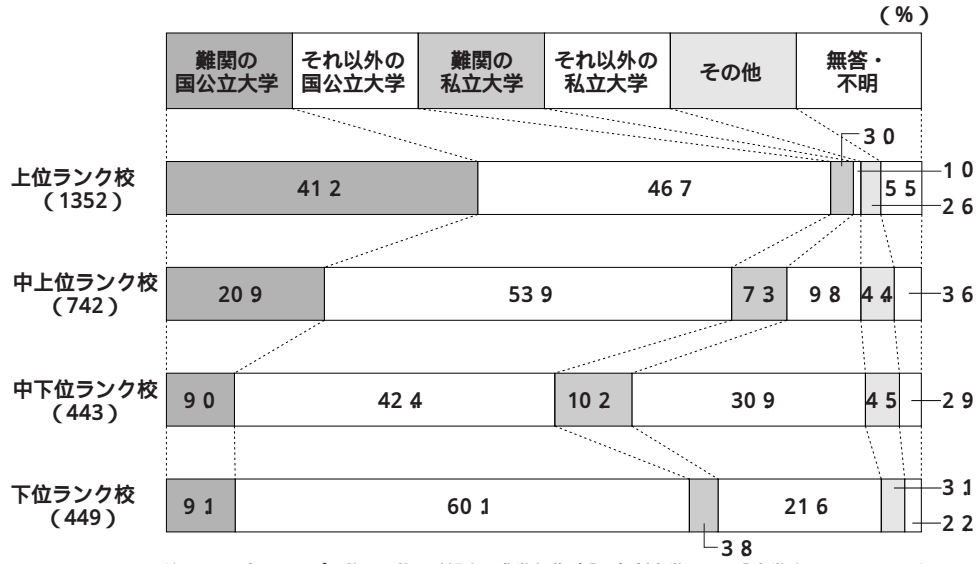
図1-2-16 希望する大学のタイプ



注1) 希望する進学段階が「四年制大学まで」および「大学院まで」と回答した者について設定。

注2) サンプル数は2986人。

図1-2-17 希望する大学のタイプ（学校ランク別）



注) ( )内はサンプル数。母数は希望する進学段階が「四年制大学まで」「大学院まで」の2986人。

### ③希望する入試の方法

入試の方法は、58.2%が「できれば一般入試で」、39.1%が「できれば推薦入試（AO入試）で」を希望している。推薦入試の希望率は、下位ランクの高校ほど多い。

Q

大学へ進学する方法には、大きく分けて「推薦入試（AO入試）」と「一般入試」の2つの方法があります。あなたは、どちらの方法で進学したいですか。

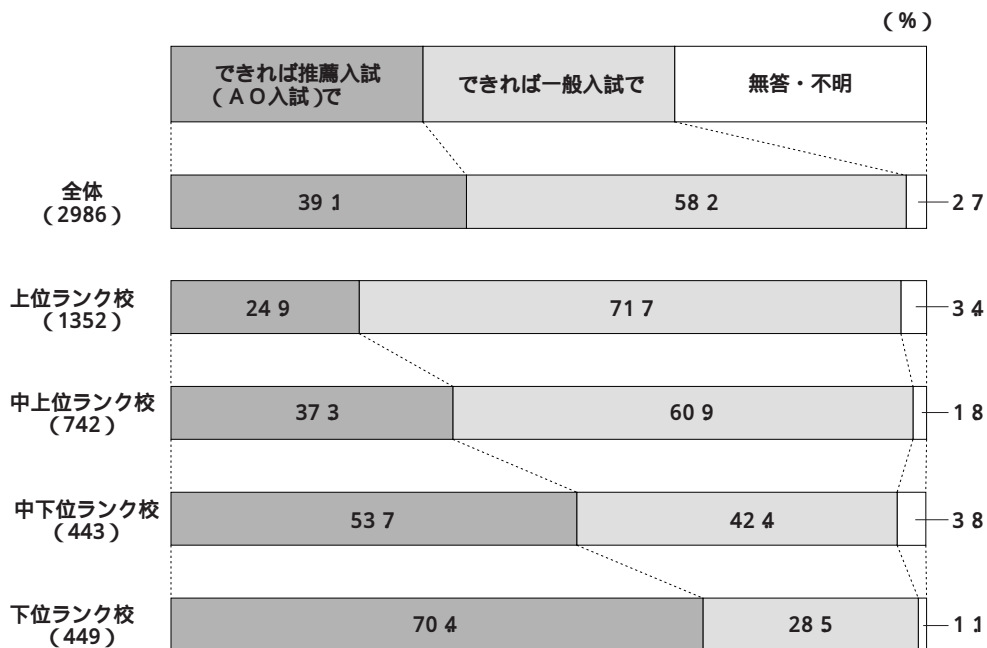
四年制大学あるいは大学院へ進学を希望する者について、続けて、「推薦入試（AO入試）」と「一般入試」のうち、どちらの方法で進学したいかを尋ねた（図1-2-18）。

全体としてみると、58.2%が「できれば一般入試で」、39.1%が「できれば推薦入試（AO入試）で」と回答している。一般入試を希望する者が多数派であるが、推薦入試を希望す

る者も4割弱に達する。

推薦入試の希望率は、学校ランクの低い高校ほど目立つ。「できれば推薦入試（AO入試）で」の比率は、上位ランク校から順に、24.9% 37.3% 53.7% 70.4%である。上位ランク校でも4人に1人は推薦入試派だが、下位ランク校ではそれが3人に2人に及んでいる。

図1-2-18 希望する入試の方法（学校ランク別）



注) ( )内はサンプル数。母数は、希望する進学段階が「四年制大学まで」「大学院まで」の2986人。